

訂增
版三第

經濟學講義

完

法學博士福田德三著

東京 大倉書店發行

330
270



第三版に序す

本書は分冊の版を重ねる毎に多少の訂正を加へ、合本第一二版共にまた誤植等を匡すに意を用ゐたれども、猶ほ意に満たざる所尠からざりしが、此度第三版を刮削に附するに方り、全篇を通じて増補訂正を施したれば、先以て聊か心を安ずるを得るものなり。書中削除せる中の重なるものは、坂西氏企業論の拔萃（第一編第二章）にして、是は近く續經濟學講義に於て、企業論を詳述す可ければ、今は必要を認めざるに至れるものなり。而して此によりて剩し得たる紙数を以て所々に追論を試み置きたり。其重なるは、經濟學研究法に關して河上教授に答ふる一文にして、兼て約束し置きたるものなり。其他多少の増補を企てたる

所少からず、又た新刊書の類は勉めて之を加へ、改版あるものは其由を言ひ置けり。斯くて予が見聞の届き、微力の及ぶ限りは、最新の進歩に後れざる様期したれば、爾今暫くは復た改版の必要なきかと思ふものなり。予は決して一時の安を偷まむと欲するものにはあらざるも、去四十年に始めたる本書の業茲に一段落を告げ、是よりは續經濟學講義の進行に一意専心するを得るを喜ばざるを得ざるなり。

顧みれば、予が此書の稿を起したるときは、前途甚だ遠慮にして、果して中絶するなきを得るや否や聊か懸念なきを得ざりき。其後身邊の事情は種々の變遷を経過する間に、本書のみは、江湖の優渥なる知遇を忝ふし、學友諸氏の懇篤なる鼓舞は言ふまでもなく、未見の人士にして書を寄せて激勵せらるゝあり、欠點を

指摘して予が蒙を啓かるゝあり。此等内外の援助なくんば、此書恐らくは、中絶の厄を免れざりしならむ。

本年の初より高等商業學校に於て經濟原論の講義を担当することとなりしは、予が研學の上に著しき助となれり。其は慶應義塾に於けるマーシアル講義の外別に全く異なる考案を起す必要は、予をして再び全體に涉りて經濟學の叙述法に工夫を積む機會を得せしめたる是れなり。而して予は此によりて得たる經驗を他日續經濟學講義の上に必ず顯はし得可きを信ずるものなり。

前版には叙述法に就て卑見を陳ぬ可き様序言し置きしも今は其要を見ず。唯茲に公私の知己に對し一言感謝の意を明にし、續經濟學講義の書出版近きにあるを告白するを得ば則ち足

れり。

明治四十三年五月 鎌倉三素書房に於て

著者識す

經濟學講義に序す

此書名けて經濟學講義と云ふ既に繰返したる講義の謂にあらす將さに新たに試みんと欲する講義の意なり。今此を慶應義塾講堂の裡に止めず況く世上に公けにして斧正を待たんとするに臨み予は先づ陳辨の辭を以て讀者に見ゆ可き義務あるを感ず。

予が經濟學の講義に従事する前後五學年前の三回は高等商業學校に於てし後の二回は慶應義塾に於てしたり。其第一回の講義は歸朝後起稿の餘日尠もなくして直ちに壇に登らざる可からざりしが故に予は留學中ブレンタノ先生に受けたる講義の筆記を其儘自己の原稿とし續かに私業を挿むに止めたり。故他なし予は留學の間學ぶの急なるを思ふのみにして教ゆるの義務を有することを忘れ新らしき事知らざる事を追ひ求むるに忙しく退て得たる見聞を整理して講義の草稿を作ることを怠りしが爲なり。第二回の講義は多少準備の餘裕ありて漸次に

も内容にも稍々自己の工夫を試みたれども、大體に於て翻案翻譯に外ならざりき。是を以て予は講壇に登り學生に見ゆる毎に不安忸怩の念禁せんとして能はず、徒らに厚藤を食み、優待を辱かしむるを願みて心中堪ゆ可からざる苦痛を感せり。故に其第三回に於ては、刻苦勉強して始より終まで、自家鍛錬の作物を以てして、此苦痛を免れ、重き責務を少しく輕ふするを得んと志し、三十五年の冬より翌三十六年の秋に涉りて、經濟原論の起稿に従事せり。是れ同年九月以降高等商業學校に於て試みたる予が第三回の講義にして、其一部分を國民經濟原論と名けて、同時に梓に上せて世に問へるものなり。然るに其書は出版物として、全然失敗の事に了り、續零刊行の望全く絶へ、既刊部再版の機會亦なく、書成りて後、自ら所々に發見せる誤謬を匡し、また公井に私に與へられたる批評を參酌して、根本的改修を加へんとの心願は、終に充さるゝ時なくして訖れり。恰かも時を同ふして、高等商業學校に於ける予が、經濟學の講義も亦た無用の事となり、此第三回を最終の講義として、予は匆々行李を收めて、都門の外に退き、靜修存養復た他事を願みる暇なかりき。

越へて年餘、慶應義塾予に科外講義を囑する事ありて、一週一回篤志者と三田山上の講堂に會するに至りしが、未だ經濟原論の全部に涉りて講義することなくして止めり。翌年慶應義塾は新たに經濟原論の科を増設し、予は入て教壇の一人となり、其講義を分擔するところなるに及び、再た全體に就きて、多少の工夫を積む機會を得たり。然れども國民經濟原論出版以後、閱せる四年の星霜は、予をして自己修養の熟せず、準備の整はざるを彌々深く覺らしむるのみ。蓋し予が當時の企は、大膽無謀を極めたるものにして、翻案翻譯の時代既に去りて、忽ち自家の學問を一系統として展ぶ可き經濟學概論なる書の著述を作さんとし、出版業の困難と、學界の錯綜とに迂遠なるを顧慮せざる輕率なりしこと、到底否むに由なき所なればなり。故に予は國民經濟原論を新なる面目の下に再生せしめんには、先づ全力を傾注して、自家學問の整頓を圖らざる可からざるを思ふ切なりき。恰も好し、慶應義塾の講義は我邦に行はれたる一般の慣例を破る可き新案に成る者にして、從來講義と云へば、教師は机上の原稿によりて口述し、學生は筆を執りて之を轉寫するに

限られしが、此講義は數百の學生を一堂に集むるの弊多きを思ひ、一級を數部に分割し、各組毎に教師を異にし、一定の教科書を與へ之れに就て講授することとしたる者なり。予は教育術の専門家にあらざれば、此の新制と從來の舊制との優劣を品臨する能力を有せざるものなれども、學生化して速記者となり、耳に入る所直ちに手に移り、中間の頭腦は、講義を聞くの後の空虚なると聞かざる前に同じきの憂、割合に少くして、學生の理解力と讀書力と外國語の教科書を用ゆるにより外國語の讀書力一などを養ひ得ること、筆耕と囁語とを維れ事とするに勝れるものあるを確認するものなり。而して教師たる予に取りては、慶應義塾の此新案は更らに一大なる利益を有せり。予は經濟學の講義に従事する既に數回を重ねたれども、未だ一回も全部を講了するに至らず、又た自ら満足する稿案を作り上げたることなく、而して國民經濟原論の中既に公けにしたる分、并に草稿として予が手許にある者は、誤謬欠陥余りに多くして、之を學生に講述するの勇氣を有せず、遂かに之を改造すると亦た容易ならず。然るに教科書を土臺として、之を予が今日まで學び得

たる所を以て増減し、解剖し、論評しつゝ、講述するにより、予は一も良心の呵責を蒙るることなくして、業に従ふを得たることは是なり。而してまた此れが爲めに、予は自家修養の工夫を凝らすの餘力を剩し得、并に散亂せる諸種の舊稿を蒐集整理して、經濟學研究なる一書を上梓するの餘時を見出し得たることは、予が殊に感謝せざる可からざる所なり。

茲に及んで予は再び國民經濟原論新刊の必ずしも絶望す可き事にあらざるを覺へ、筆動かんと欲して抑へ難きを感せり。而も進んでは今此れを出版す可き準備未だ備はらず、退ては自家學問の系統を成し上ぐ可き修養未だ甚だ足らず。曩時の輕舉を復びすることは、予の直情徑行を以てして、猶は敢てするの勇氣を缺く。若かず先づ予が過ぐる一學年の間に得たる經驗を基とし、新學年に於て爲す可き講義の概要を自ら記述し、之を講壇に試むると共に、汎く世間に出して其教を得んにはと、乃ち經濟學研究校訂の業卒るの日より始めて推敲陶鑄漸くにして得たるものは即ち今茲に公けにする經濟學講義是なり。

慶應義塾の講義はマーシアル教授の大著經濟原論を用ゆ。マーシアル氏は現存英國經濟學者中第一の耆宿にして、其著は獨逸のシユモラー、ワグナー兩氏の經濟原論と相並んで現今斯學の三大巨作と稱せらるゝ所なり。然れども學者各々信ずる所あり、予は悉く教授の論を奉ずること能はず。此書教授研鑽の金玉は之れを洩らさざるを勉むると共に、又た予が自家所藏の瓦礫を以て之と相攻むること尠からず。思ふに罪を教授に得る甚大なる者あらん。唯だ論を平にし、辭を明にして、難澁混沌を以て讀者を惱まざらんを力め、玉と石と一に其採るに任せて妨害を設けず、殊に予か舊著に於て陷れる煩瑣街衢の過を再びせざらんを期せり。予果して其欲する所を成し得たりや否や、謹んで江湖先覺の鑑明を仰ぐ。

若し夫れ本書あるによりて、外は曩に國民經濟原論を以て普く學界に得たる罪過の幾分を償ふを得、内は之によりて予が性來の怠慢を鞭撻するの料と爲すを得んか、庶幾くは予が忘れんとして忘るゝ能はざる四年前の處女作は更らに新たに世に見ゆるの時あるを得ん。

此書成る一に慶應義塾の賜なること叙する所の如し。今其出版に際し、予は謹んで不見の師故福澤先生の高風を追憶し、義塾創立第五十年を紀念せざるを得ざるなり。

徒らに長き序文を以て讀者を煩はしたるを謝し、併せて此書著作に際し予を激勵し、補助したる友人に深謝の意を表す。

明治四十年八月二日

駿河靜浦に於て

著者識す

經濟學講義目次

第一編 總論

一一三六

第一章 緒言

一一二六

經濟學は人間研究の一部なり(一) 宗教と經濟(二) 貧乏は人類向上の妨害なり(三) 貧民階級存在の必要ありや(四) 最近勞働階級の上進著し(五) 此れ經濟學の最高最重の問題なり(六) 經濟學の進歩遅々たり(七) 近世産業生活の特色は競争に在らず(八) 然らば何に存するや(九) 深謀遠慮是なり(一〇) 隣人と外人(一一) 半開國の商業道徳低き所以(一二) 文明國の商業道徳高き所以(一三) 經濟的自由其制限(一四) 第一編の結構(一五)

目次

一

補論 經濟學は人と富との關係の學なり(一七) 所謂經濟學の定義
 マーシャルの用意(一七) 純理論と政策論(一七) マーシャル主張の
 二要点(一七) 人格の尊重、深謀遠慮の進歩(一七) 参考書の重なるもの
 (一七) 邦書(一七)

第二章 産業の自由并に企業の發達

二七—五五

氣候の影響(一七) 習慣と本能の勢力(一七) 天然包圍の作用は稍文化
 の域に到りて顯はる(一七) 餘剰の富は文化發展の前提なり(一七) 温
 暖なる氣候(一七) 寒烈なる氣候(一七) 下層民を壓抑する文明は永続
 せず(一七) 太古の共產、共有の制度(一七) 習慣を打破するの困難(一七)
 個人的活動の曙光(一七) 共產、共有制度の影響を無視するは誤なり
 (一七) 習慣を打破せる先進國民(一七) 希臘民族(一七) 希臘文明の缺

陥は人格の尊貴を認めざりしにあり(一七) 自由を濫用せしにあり
 (一七) 羅馬民族(一七) 羅馬の所謂社會問題(一七) 下層民の人格を認
 めざりしこと希臘に同じ(一七) 羅馬法の經濟上の重要(一七) 「ストア」
 哲學(一七) サラセン民族の文明其衰亡(一七) チュートン民族、素樸の
 風、剛健の性(一七) 封建制度の經濟上の作用(一七) 基督教會と經濟的
 進歩(一七) 十字軍役(一七) 伊太利、西班牙の興亡(一七) 和蘭、佛國、英國
 の勃興(一七) 次章を要する理由(一七)

補論 モンテスキューとバツクル(一七) 習慣の勢力と歴史派經
 濟學(一七) ブユヘルの新説(一七) シュモラーの説(一七) フキリツボ
 ヲネツチの折衷説(一七) 第二章参考書(一七)

第三章 英國に於ける産業自由并に企業の發達五七—九四

中央集權の發達(三三) 「エフマン、アーチャー」は英國に於ける企業發達の先驅なり(三三) 黒死病と農業進歩との關係の英國と大陸とに於て相異なる所以(三三) 新教の影響(三三) 清教徒の飲點(三三) 宗教改革の間接の影響、大陸工業の移植(三三) 英國産業發達の特色(三三) 分業の發達と企業階級の發生(三三) 羊毛工業之が先驅たり(三三) 工業の地方的集中(三三) 家内工業の發生(三三) 工場制度(三三) 機械の發明(三三) 大企業者の輩出(三三) 移動の自由と自由貨銀制度(三三) 新産業組織の長短(三三) 反動的傾向(三三) 新弊害に應ず可き新救済法(三三) 名は對等にして、實は甚しき不對等なり(三三) 勞働問題の聲漸く高し(三三) 「トレード、ユニオン」の發達(三三) 新時代の新經濟問題(三三) 「自ら助く可く助くる」主義(三三) 共同主義は自由主義發展の結果なり(三三) 此趨勢は獨り英國に止まらず(三三) 歐洲大陸と英國との相異なる所(三三) 獨逸の宿僚主義の長短(三三) 經濟生活と經濟學

(三)

補論 英國經濟史に關する重なる著述(三三) 企業の問題は後段の詳述を要す(三三) 獨逸學者の企業論とマーシアルの企業論(三三) マーシアルの引用書(三三) アダム、スミスの農業論(三三) ゴムバルトの新説、其反對論(三三) ゴムバルトとアダム、スミス(三三)

第四章 經濟學の發達

九五―一三六

經濟學の發達は産業生活の發達に伴ふ(三三) 希臘、羅馬學者の經濟論は主として國家の問題なり(三三) 教會法學者の經濟學上の貢獻(三三) 新經濟學説は個人覺醒第三階級勃興の時代に發生す(三三) 「ルネサンス」は先づ中央集權を目的とす(三三) 故に其第一の問題は國家を富ますにあり(三三) 國を富ますに第一の問題は貨幣を集積するにあり

目次

(28) 「メルカンチリズム」は此意味を以て解す可し(28) アダム、スミ
 スの攻撃の真意(29) 祖述者の浅見(30) 「メルカンチリズム」の功過
 (31) 「フホシラクラシー」其反動として起る(32) 其功過(33) 「フホ
 シラクラシー」のアダム、スミスに及せる影響(34) アダム、スミス以前
 の英國學者(35) アダム、スミスの大なる所以(36) 其の自由貿易論
 (37) 最大の貢献は價值論にあり(38) 後世に及せる影響(39) 貨
 幣と動機に關する新見解の普及(40) アダム、スミスの後繼者(41)
 アーサー、ヤング(42) マルサス(43) ベンダム(44) ベンタムの祖
 述者(45) 其欠點(46) 貨幣并に外國貿易に關する所論は多く正鵠
 を失はず(47) トツク、マカロツク、ポーター等(48) 歴史的統計的研
 究を勉む(49) 未だ比較的研究法を學ぶに及ばず(50) シテ、マン
 を以て類推するの謬(51) 英國學者の通弊(52) 勞働を商品視す
 (53) 貧者に對する同情と諒解とを欠く(54) 却て實際に迂し(55)

六

此弊を痛撃せるものは社會主義なり(56) 社會主義論者の短所(57)
 其長所自ら深遠なる真理を包蔵す(58) 其のコムト并にミルに及ぼ
 せる影響(59) 經濟學最近の傾向(60) 其原因(61) ション、ステュア
 ート、ミル(62) シエヴオンス(63) 佛國の社會主義學者の大なる貢
 獻(64) ケリー(65) フリードリヒ、リスト(66) リストの學說の依
 て生ずる所以(67) ヘルマン(68) 歴史派學者、ロツシアー、クニース、
 ヒルデブランド(69) 現在斯學の素斗、ワグナー(70) シュモラー
 (71) プレンタノ(72) マーシアル(73) カール、マルクスの社會主
 義學說(74) 第四章結論(75)
 補論 經濟學史の参考書二三(76) 同上邦書(77) マーシアル
 の引用書(78)

第五章 經濟學の範圍

一三七—一五七

目次

七

コムトの社會學と經濟學(二五七) 學問分業の要(二五八) ミルの言(二五九)
 經濟學の範圍を定むる方針(二六〇) 經濟學の特色(二六一) 一定の貨幣額
 により秤量せらる(二六二) 經濟行為限定の標準(二六三) 經濟行為は目的
 行為なり(二六四) 快樂と苦痛との秤量(二六五) 經濟の本則の真意(二六六)
 同價格により言ひ顯はされたる快樂(二六七) 其異同(二六八) 習慣の影響
 (二六九) 營利行為の真意(二七〇) 貨幣額に顯はるゝ損得(二七一) 經濟上の
 財は低き財にして倫理上の財は高き財なり(二七二) 其他の考慮を參酌
 するに要する注意(二七三) 共同的行為を彌々普及せんとす(二七四) 經濟學
 の範圍を限定する二個の標準(二七五)

補論

經濟行為論と經濟組織論(二七六) 營利行為と經濟行為(二七七)

マーシアルの論移して經濟組織論の根本概念と爲す可し(二七八) 國民
 經濟原論の誤謬(二七九) 行為論と組織論とを調和するの困難(二八〇) 重
 なる參考書(二八一) シュモラーとマンガー及デルターとの論争(二八二)

邦書略評(二八三) マーシアルの引用書(二八四) 經濟動機論を略する理由
 (二八五)

第六章 經濟學の研究法

一五九—二二二

研究法に關する論争(二八六) 經濟學上の學派(二八七) 今日の學者が一致
 する點(二八八) 演繹學派と歸納學派(二八九) リカルド及ミル(二九〇) 歴史
 派(二九一) 埃國派(二九二) 學問に學派ある可からず(二九三) シュモラーの
 公平なる見解(二九四) マーシアル之れに同す(二九五) 演理を主とする學
 者記實を主とする學者(二九六) 學問の要は因果關係の發見にあり(二九七)
 其準備事業(二九八) 演理と記實は必ず相伴はざる可からず(二九九) 定式
 存せず(三〇〇) ミルの見解(三〇一) 演繹過重の誤(三〇二) 歴史過重の弊
 (三〇三) 歴史は繰返へすと云ふ語の真意(三〇四) マーシアル所論の取り

目次

難き點(二七) 歴史派の欠點(二七) 學派に偏す可からず(二七) 政策的傾向を加味するの弊(二七) 政策研究の真意(二七) マーシャルの穩健なる見解(二七) シュエモラーの論亦然り(二七) 學問の目的は政略にあらず(二七) 理論經濟學と實地經濟學(二七) 學と術(二七) 純正經濟學と應用經濟學(二七) 所謂經濟學の部門(二七) 經濟學の名稱(二七) 經濟學の分類(二七) フキリツボグキツチの分類(二七) 實際上の分類(二七) 學問の本質よりする分類(二七) 現象の學(二七) 發展の學(二七) 系統の學(二七) 經濟的法則(二七) 法則に四の意義あり(二七) 經濟的法則は第二次的自然法則なり、道德的法則なり、史的法則なり(二七) 史的發展の法則と云ふ意(二七) 傾向の記述(二七) 從來の經濟學上の法則(二七) 規範と法則(二七) 以上總括(二七) 經濟學現在の共同の立場(二七)

補論 參考書の重なるもの(二七) 金井博士著書の研究法に關す

る所論(二七) 河上氏著書略評(二七) クニースの史觀經濟論(二七) 河上教授に答ふる四則(二七—三三)

總論附録

經濟學研究の葉

二二三—二三六

多讀と精讀(三三) 第一流の書を読む可し(三三) 最近第一流の書、マーシャル原論を読むに要する注意(三三) シュエモラー原論の略評(三三) フキリツボグキツチ原論(三三) ワグナーの二著述(三三) コーン原論の略評(三三) 初學に適する英書(三三) 同上佛書(三三) 同上伊書(三三) 同上獨書(三三) 其他の教科書類(三三) 經濟學過去の名著(三三) スミス著書の諸版本(三三) マルサス人口論の諸版本(三三) リカルド全集(三三) ミル原論の諸版(三三) シエヴォオンスの著書(三三) ヘルマンの

目次

111

著書(三三) ロッシアーの原論(三三) 経済字典の重なるもの(三三) 雜誌の重なるもの(三三) 邦文経済原論總評(三三)

第二編 経済學の根本概念

二三七—三五四

第一章 緒論

二三七—二六四

経済學立論の三種(三三) 試に下せる三形式(三三) 之をマルクス流に示す(三三) 第三の形式は第二の形式の一變態のみ(三三) 之にマルクスの二形式を加ふ(三三) 交換財と消費財(三三) カーヴアーの言(三三) 以上の説明を圖解す(三三) マーシアル自ら其書の結構を説く(三三) 其形式(三三) 之を批評す(三三) 富の本質論と分類論(三三) 其圖解(三三) マーシアルの辯明(三三) 其欠點(三三) 經濟學と生物學(三三)

補論 經濟學立論に関する諸説(三三) 瀧本教授に答ふ(三三) フ

グナー、ヴォルフの説(三三) 参考書(三三)

第二章 富

二六五—三〇三

富と財、附財産(三五) 有形財と無形財(三五) 内界の財と外界の財(三五) ヘルマンの言(三五) マ氏所論の欠點(三五) 讓渡得る財と讓渡得ざる財(三五) 圖解(三五) 自由財(三五) 非自由財と經濟財(三五) 占有(三五) 個人の富(三五) 廣義の富(三五) 共同的の富(三五) 世界的の富(三五) 價値の概念の二種(三五) 客觀主義と主觀主義(三五)

補論 財産に関するノイマンの定義(三五) マ氏所説と異なる點(三五) スピノの説(三五) 卑見(三五) 權利は財なりや(三五) ノイマンの説(三五) ボエム、パヴェルク(三五) 内界の財(三五) 關係(三五) 自由財と經濟財との異同(三五) 瀧本教授の説(三五) ノイマンの説(三五) 瀧

目次

第三章 生産、消費、労働

三〇五—三二五

生産の意義に関するマーシャルの説(三〇五) 之を評す(三〇六) 利用を生ずること即ち生産なりとの説を駁す(三〇七) 價値を生ずる行為(三〇八) 生産たらざる經濟行為(三〇九) 然れども生産と經濟行為とは多く同義語なり(三一〇) フックスの説(三一〇) 消費に関するマーシャルの説(三一〇) セニオル(三一〇) 卑見(三一〇) 労働に関するマーシャルの説(三一〇) 其批評(三一〇) 生産的なる語の意義(三一〇) 生産的消費(三一〇) 卑見(三一〇) 苦痛を伴ふもの労働なり(三一〇) 不生産的労働なるものなし(三一〇) 労働と遊戯(三一〇) 苦痛の意義に関する誤解を匡す(三一〇) 貨幣價値を有する目的の手段としての労働(三一〇) 消費的生産(三一〇) 必要物の説明を

省く(三一〇)

補論 生産と消費とは反對の事實にあらず(三一〇) 利用の發生及消滅を以て之を説明するは誤なり(三一〇) 貨幣價値を以て標準とすべし(三一〇) **圖解**(三一〇) 物の保持及永續的使用(三一〇) 交換論と分配論(三一〇) 第二次的概念なり(三一〇) 生産行為と労働(三一〇) 力作(三一〇) **参考書**(三一〇)

第四章 所得と資本

三二七—三五四

貨幣價値の秤量(三二七) マーシャルは資本に關しては此標準を一貫せず(三二七) 資本に關する難問必しも釋き難きにあらず(三二七) 富は多く消費と關連してのみ用らる(三二七) 資本の根本義、生産の用に供せらるるもの(三二七) 資本とは所得を生ずるものと云ふ(三二七) アダム、スミス

目次

一五

の卓見(三三) 収入價值と資本價值(三三) マーシャル所得より立論す
 (三三) 其資本の定義(三三) 個人的資本、社會的資本(三三) 純所得(三三)
 利子(三三) 利潤、企業利得、貸子及準貸子(三三) 資本の種類(三三) 固定
 資本、流通資本(三三) マーシャルの社會的資本論(三三) 収益(三三) シ
 エヴォルヌス説(三三) 生産要素としての資本(三三) 所得を標準として
 富力を測る(三三) 社會的資本なる概念を排する理由(三三) 生産性、豫
 見性(三三)

補論 資本と資本財に関するクラークの説(三三) マルクスの不
 變資本、可變資本(三三) ボエム、バヴェルクとクラークとの論争(三三)
 予はクラークに與す(三三) ヒルデブランド(三三) 融通資本、不融通資
 本(三三) 参考書(三三)

第三編 慾望と其充足 (需要論)

三五五—四七五

第一章 緒論

三五五—三六五

經濟學の部門(三三) マーシャル獲得の部門(三三) 第一版と最新版と
 の差違(三三) 其當否を論ず(三三) 消費論は經濟學の始にして終なり
 (三三) 消費論研究の物與せる三理由(三三) 其説明(三三) 更に第四の
 理由を加ふ(三三)

補論 ロッシアー原論の編次(三三) シュモラー(三三) コーソ
 (三三) ビエルソン(三三) 参考書(三三)

第二章 慾望と經濟行爲

三六七—三八二

マ氏の慾望論と最近の研究(三三) マ氏所論の二要點(三三) 聲聞の慾
 (三三) セニオール(三三) 認識を求むる衝動(三三) シュモラー(三三) プ

目次

一七

レントノ説(三三) 行動の衝動(三三) マ氏バンフキードを評す(三三)
 其説却て認れり(三五) プレントノの慾望本位説(三五)
補論 ヘルマンの慾望分類(三七) シュモラーの衝動の分類(三七)
 プレントノの慾望の分類(三七) 認識を求むる衝動中心たり(三九) 參
 考書(三九)

第三章 消費者需要増減の理

三八三—四〇九

消費者需要と營利的需要(三九) 利用と價格(三九) 慾望無限の原則、有
 限の原則(三九) 利用遞減の法則(四〇) マ氏の定義(三九) 限界購入分
 限界利用(三九) 此法則の前提條件(三九) 其説を評す(四〇) 時間の經
 過(三九) 利用遞減の作用を例證す(四〇) 限界需要價格(三九) 貨幣の
 限界利用(三九) 兩面の觀察(三九) 圖解(三九) 需要定表(三九) 需要増

加の二意義(三九) 一般市場に於ける需要の變動(三九) 需要増減に關
 するマージナルの定理(四〇) 其批評(四〇)
補論 本章の問題は最も數學的研究に適す(四三) 數學派經濟學
 (四三) ゴッセンの偉功(四三) 埃國派は多くゴッセンに取る(四三) 利
 用遞減の法則はゴッセンの創説に係る(四三) ゴッセンの人類行為の
 根本原則(四三) 其斷案(四三)

第四章 需要伸縮の法則

四一一—四三三

需要伸縮性の意義(四二) 伸縮性の大小(四二) 其關係猶ほ熱と物體と
 の如し(四二) 供給と慾望(四二) 需要伸縮の定義(四二) 其批評(四二)
 予の定義二(四三) 之を改言す(四三) 伸縮なき場合の圖解(四三) 價に
 高低ある場合の伸縮圖解(四三) 供給増加する場合の伸縮圖解(四三)

需要伸縮不等の法則(四三) 其圖解(四三) 其變動(四三) 之を例證す

(四三) 價高き奢侈品の場合(四三) 珍奇なる貨物(四三) 生活必需品

(四三) 水の例(四三) 住居(四三) 衣料(四三) 感情の作用(四三) 使用種

類の多少と伸縮の大小(四三) 時間の経過より起る變動(四三) 之を六

項に分つ(四三) 第一次需要と傳來需要(四三)

補論 ヨツセンの説(四三) 参考書(四三)

第五章 限界利用均等の法則

四三五—四五九

物の異なる使用(四三) 假例(四三) 同一物の使用法選擇の理(四三) 限

界利用均等の法則を定義す(四三) ヨツセンの説(四三) 最終の原子の

價値即ち限界利用(四三) マ氏の假例(四三) 自足經濟と貨幣經濟との

限界利用配當上の差異(四三) 其例(四三) 經濟道德の根源茲に在り

(四三) 將來の使用の現在に於ける利用(四三) 二箇の條件(四三) 將來

を割引す(四三) 利息の少き業を撰ぶ理由(四三) 架空の價値(四三) 數

量的比較の困難(四三) バグエルクの利子論の欠點(四三) マ氏の所謂

二の推定(四三) ヨツセンの説(四三)

補論 プレンタノの説(四三) バグエルクを評す(四三) トマス及

アダム、スミス(四三) ミル(四三) 参考書(四三)

第六章 價格と利用

四六一—四七五

消費者餘利(四三) 卑見之に合せず(四三) 卑見を圖解す(四三) 賣買の

例亦同一理なり(四三) マ氏誤謬の原因(四三) マ氏の茶の例(四三) 市

場事情より受くる消費者の利益(四三) 市場需要に就ても其理同し

(四三) 購買力の減少と貨幣の限界利用(四三) ギッフェンのパン論

(四三) スルヌー井の説(四三) マ氏説を評す(四三)

補補 省略の理由(四三)

第四編 生産の働因 (供給論)

四七七—六七七

第一章 緒論

四七七—五〇〇

マーシャルの編序を批評す(四七) 生産論は其實生産要素論なり(四七)
 否生産要素増減論なり(四七) マ氏論序の特色(四七) 生産なる術語の
 成立(四七) スチュアート経済學の編序(四七) アダム、スミスの編序
 (四八) ポアローの編序(四八) リカルドの編序(四八) マルサス原論の
 編序(四八) ジエームス、ミル四分法を創む(四八) セイ原論第二版三分
 法を執る(四八) トレンス生産論を詳述す(四八) 生産要素なる術語の
 成立(四八) アダム、スミスの収入の三種(四八) セイ此語を創む(四八)

其他の學者(四九) 三要素か二要素か(四九) 經濟生活の要素と改稱す
 る傾向起る(四九) シュエモラー(四九) セリグマン(四九) 第一章マ氏所
 論を紹介す(四九) 生産要素總論と供給總論(四九) 生産の働因(四九)
 マ氏の定義(四九) 第四の働因、企業(四九) 人口論の特殊なる地位(四九)
 人口論は生産論に入る可し(四九) 需要と供給(四九) 非利用の説(四九)
 限界非利用(四九) シェゾオンスの勞働理論(四九) 疲勞遞増の法則
 (四九) 供給價格の説明(四九) 供給價格定表(四九) 其勞銀との關係
 (四九) 勞働需要供給の調和(四九) マ氏供給總論を批評す(四九) 生産
 唯一最高の働源は人間あるのみ(五〇) 愉快と苦痛(五〇) 供給を掌る
 ものは企業なり(五〇) マ氏の此點に關する誤謬(五〇) 勞働も人より
 見れば一の企業なり、マルクスの論中れり(五〇)

補論 参考書(五三)

第二章 生産要素としての土地の特質(不変性)五〇七―五二七

土地なる術語の内容一定せず(五〇七) 土地と資本と相分つ可きや否や(五〇七) 土地の特質に関する通説、其誤謬(五〇八) リカルドに胚胎す(五〇八) 本来固有性、不可壊性(五〇九) 土地の固有性とは何ぞや(五〇九) マ氏及セリグマン(五一一) 不可壊性に関するセリグマンの説(五一一) 土地と資本との此點に於ける異同(五一一) 土地の不変なる特質は唯一延長あるのみ(五一一) セリグマンを参照す(五一一) 其誤謬(五一一) 土地に不変性なしとするは謬なり(五二六) セリグマンの「物自らの増加」(五二七) マーシアルの土地論大意(五二八) マ氏の結論(五二八) プレンタノの説(五二九) 地位を獨占的なりとする論服し難し(五三二) 其理由(五三三) 獨占的なるは延長あるのみ(五三三) 予が師説に背く所以不得已なり(五三三)

補論 参考書(五三三) 歴史派の諸學者(五三三) コーン(五三六) コーン

はマ氏に勝れり(五三三) 第二章分割の理由(五三七)

第三章 土地の豊度(可變性)

五三九―五四一

豊度の二要素(五三九) マ氏之を説明す(五三九) 物理的性質(五三九) 化學的性質(五三九) 悉く人間勞働の結果なり(五三九) 皆可變的なり(五三九) 氣候の關係(五四〇) プレンタノの説(五四〇) マ氏同様の説を爲す(五四〇) 兩説を論評す(五四〇) マ氏の謬説(五四〇) 年分所得(五四〇) 不変性と可變性と相對關係(五四〇) 終に收穫遞減の現象起る(五四一)

補論 参考書(五四一)

第四章 收穫遞減の法則

五四三―五八一

收穫遞減の法則とは何ぞ(五四三) 收穫遞増(五四四) 通説の拙なる説明(五四四)

目次

二五

マ氏の言を引く(五七) 此言を應用して其誤謬を明示す(五八) 收穫遞減論の擴張(五九) セリグマン其一例たり(六〇) 地代は餘剰なりや(六一) マ氏類似の説を立つ(六二) 最大限界利用を有する土地(六三) 耕作の限界とは土地利用の限界の謂のみ(六四) マ氏の矛盾(六五) 利用遞減論は收穫遞減論の變態なり(六六) マ氏も之を認む(六七) 收穫遞減論發生の事情(六八) 人口過剰問題と密接の關係あり(六九) キアナンの言(七〇) 此言移して後の學者を評す可し(七一) 面積の大小を按排する標準(七二) マ氏此法則を再言す(七三) 繼續的定量分と收穫遞減(七四) 限界收穫、最終定量分(七五) 餘剰收穫の意義(七六) リカルドの前提の當否を論ず(七七) 遞減、遞増の割合(七八) 豊度には絶對的標準なし(七九) 連鎖の例(八〇) 二の異なる意義(八一) 耕作方法の變遷(八二) 耕作にも亦絶對的良否なし(八三) マ氏の餘論(八四) 之を省略す

補論 参考書、キアナン(八五) ウエストの書(八六) リカルドの序文(八七) チュルゴ(八八) ウエストを以て創說者と爲す(八九) ウエストの言を引く(九〇) 其真意(九一) 三大問題(九二) マルサスの收穫遞減論(九三) リカルドは兩者を布演せるのみ(九四)

第五章 人口の法則

人口論の地位(九五) 國民經濟の要素とする説(九六) 生産要素とする説(九七) 靜態の觀察、動態の觀察(九八) 人口増減論より起る(九九) 人口論と人口統計(一〇〇) 第三の要素と關連してのみ意味あり(一〇一) 其理を圖解す(一〇二) 經濟的關係の意義、圖解(一〇三) 舊說新說に勝る(一〇四) 人口論成立の事情(一〇五) 歴史的にのみ觀察す可し(一〇六) 社會法則たる所以に對する異説を斥く(一〇七) 收穫遞減論と離る可からず(一〇八)

經濟的なる語の眞意稍々明瞭となる其圖解(五七) 有限の原則無限の原則(五七) 目的慾望(五七) 貨幣有限性の具象(五七) 圖解(五七) マルサス人口論の三大要點(五七) 其前提(五七) 等差的と等比的(五七) マルサスの言を引く(五七) 積極的制限、豫防的制限(五七) 罪惡、窮困、道德的抑制(五七) 以上を表示す(五七) 謬傳を匡す(五七) ポーナーの言(五七) セリグマン 謬説を執る(五七) プレンタノの正解(五七) マルサス學說の變化(五七) 二要點と其變遷(五七) オドウキン「政治的正義」(五七) マルサス人口論の成立(五七) 無限の傾向、有限の事實(五七) 人爲的制限に重きを置くに至る(五七) ポーナー此を明にす(五七) 道德的抑制を認むるに至る(五七) 其眞意義を明にす(五七) 自然の大勢と人爲の調和(五七) 後世の誤解事ろ恕す可し(五七) マーシアルの所謂人口論の三要點(五七) 其論評(五七) マルサスの誤謬、プレントノ之を指摘す(五七) プ氏の言を論評す(五七) マルサスの根本學理は動かす(五七)

マルサスの眞の意は將來の豫言に關する事是なり(五三) 新マルサス主義を排す(五三) 「生めよ、殖へよ、地に充てよ」(五三) 農業關稅と人口超過(五三) 保護主義の危險(五三)

補論 參考書(五三) マルサスの著者(五三) マルサス評論の書(五三) 人口倍加年數表(五三) 我邦に於ける人口の増殖(五三) 横山氏の考(五三) 井上氏の考(五三) 右に就ての卑見(五三)

第六章 資本の増殖

六三三—六四九

生産要素の増加と供給の増加(五九) 供給の本質に關する謬説の由来(五九) 資本の増殖中心問題たり(五九) 其理由(五九) 靜態の資本(五九) 舊説事ろ新説に勝る(五九) 貨幣と資本(五九) ジョン、ロック(五九) 有限性の代表(五九) ミルの著積可能性(五九) 過去勞働の著積(五九) 手

段としての資本(三〇) マ氏所論を紹介す(三〇) 蓄積の淵源(三〇) 有形の蓄積無形の蓄積(三〇) 蓄積は利用を減ずることあり(三〇) 節制(三〇) 利率と貯蓄との關係(三〇) 利率低きとき却て多く蓄積することあり(三〇)

補論 参考書(三〇) 「富は節儉により生ず」(三〇)

第七章 労働効程の増進と分業

六五一—六六七

供給増加の人的方面(三一) 人口の數量と品質(三一) 人口の増加と労働効程の増進(三一) 器械的分類の餘弊(三一) 之を脱せんとする傾向(三一) セリグマンと津村秀松氏(三一) 予は之に服する能はず(三一) 其理由(三一) マ氏の結構完からず(三一) 労働効程の増進を詳述するはブレンタノなり(三一) 根本の大問題分業(三一) アダム、スミス(三一) 其分業

論の真意(三二) 止針の例却て誤解の基となる(三二) ブエヘルの評必すしも中らず(三二) キアナンの公平なる論(三二) アダム、スミスの擧げたる分業の三大利益(三二) ウエーキフ、ホールド、ミル、マカロック(三二) 分業と器械とに關するマ氏の論を紹介す(三二) 「代替部分式」(三二) 「内部の經濟」「外部の經濟」(三二) 企業論へ導く(三二)

補論 参考書(三二)

第八章 マーシアルの企業論

六六九—六七七

分業は協業の一種なりとの發見は企業論を喚起す(三三) マ氏の言(三三) 企業を生産要素とする説生ず(三三) 其困難(三三) 要具と組織とは同一視す可からず(三三) 手段と目的(三三) マーシアルの態度俄かに變ず(三三) 生物學と動學(三三) マーシアルの論旨大要(三三) 其結論

(三三) 第九章以下の結構(三三) 事ろ器官論に屬す可し(三三) 之を他日に譲る(三三)

補論 参考書の一二(三三)

經濟學講義目次終

經濟學講義

福田徳三著

第一編 總論

第一章 緒言

經濟學とは日常生活に於ける人類を研究するものにして、人間の個人的并に社會的行動中、人世の安寧を保つに必要なる物質的要件を獲得すること及び充用することに最も密接に關係ある部分を研究するものなり。されば經濟學は一方より云へば富に關する學問なると共に、他方に於ては人間研究の一部たるものにして、此第二の職分こそ重要また勝れり。蓋し人間の性格は其日常營む所の業務によりて形つぐられ、其得る所の物質的要件の支配を受くると宗教の影響を外にしては他に之に優る力を有するものなくして、世界の歴史を左右する最大勢力は宗教と

經濟との二なりと云ふ可し。時と處とによりては、軍事的又は藝術的精神の甚だ大なる勢力を有することありと雖も、之を宗教と經濟とに比すれば到底得て企て及ぶ可からず。而して宗教上の動機は經濟上の動機よりも遙かに力強きを常とすれども、其直接の動に就て見れば、宗教上の考慮は經濟的動機の如く、人生の全部を包含するものにあらす。之に反して、各人の生活上の考慮は、人生の大半を占め、其性格、思想、感情等の上に及ばず、影響と人との關係を支配する力の大なるを、其右に出づるものなし。

同じく經濟上の影響と云ふ中に就ても、所得の多少即ち貧富の度は所得を得る方法に比して輕視す可きものにあらす。例へば英國に於て一ヶ年千磅を得る人と五千磅を得る人との差異よりも、百五十磅を得る人と三十磅を得る人との差異の方其影響大なり、其故は百五十磅を得る者は兎に角人間としての生活を營むに差支を見ざるも、三十磅の所得にては甚だ難事なればなり。尤も宗教、家族の愛情、朋友の交情等により、物質上以外に於て、高尚なる幸福を見出し得るものあらん。乍

去多くの場合に於ては、貧乏なる生活、殊に人口稠密なる都市に於ける最下級民の生活は、人間の高尚なる性格を傷ふこと甚しきものあり。彼等は朋友を得るの機會なく、品性を維持するの道を缺き、靜坐の暇なく、又家族生活を樂むの望乏しくして、宗教も又彼等に及ぶこと能はざる場合多ければなり。されば貧民の生理上、智能上并に道徳上の不健全なる状態は種々の原因を有するや勿論なるも、其最大の原因は彼等が貧乏なるに存するや疑ふ可からず。更に稍々上層に立つ大多數の人間に就て見るも、營養衣服、住居給して足らず、幼時より勞働に従事する必要ある爲、教育を受くる機會を有せず、従て高尚なる智能上の能力を發達する能はざる者比々皆然らざるはなくして、間々高潔なる思想を懷き、富者に劣らざる安心立命を有し、幸福なる生活を營む者なきにあらすと雖も、猶ほ其貧乏は彼等に取りて、大なる苦痛の源にして、健康全き者も、猶ほ日々の衣食の料を得るに艱難して、甚しく過勞するに依り、勞働は唯々苦痛を増すのみにして、之を慰む可き樂は殆んど何も存せず。況んや一度病に罹る時は、其慘狀は更らに幾層倍せざるを得ず。彼等が精神上

の慰安を得て、其堪へ難き苦境を忍び耐へんこと、元より望む所なれども、單に之に甘じ去るは断じて不可なり。過多なる勞働、不十分なる教育の爲、悶へ且つ疲れ、心に一の安き所なく、身に一の暇をも有せずしては、到底人間としての智能を發揮す可き望是れあらず。而して、貧乏に伴ふ弊害の中、必ずしも、其當然の結果と看做す可からざるものあるや、勿論なれども、大體に就て云へば、貧者の墮落は、其貧乏なるより來ると言ふを妨げず。故に貧乏の原因を研究するは、取も直さず、人類大部分の墮落の原因を知る所以なりと云ふ可し。

昔アリストテレスは奴隷の制度を以て天の命する所なりとし、奴隷自ら亦爾か思惟し居たるが如し。基督教起りて人格尊重の思想を鼓吹し、殊に最近百年間に於て、此思想は著しく發達したるが如くなれども、其眞意を遺憾なく發揮したるは極めて近來の事にして、教育の一般に普及せる賜なり。吾人は今日社會の中、所謂下層階級なるもの、存在する必要之ありや否やの根本問題を、眞面目に研究す可き必要に迫らるゝものなり。社會大多數の人間が生れてより死するに至るまで、汝々

營々として只管勞働に従事し、其作り出す所は、社會少數の上層階級者に、高尚なる文明的生活を營むに必要なるものを供給するに止りて、其大多數の人間自らは、其貧なると勞働に暇なきことにより、此高尚なる文明生活に寸毫も與るを得ざる運命に甘んぜざる可からざるの必要ありや否やの問題は、切に解決を促がすなり。

貧乏と無學とが全く跡を人類社會より絶ち得んどの希望は、十九世紀に於ける歐洲勞働者の著しき進歩の實踐に徴するときは、必ずしも架空に屬せざるに似たり。蒸汽機械の發明は人間を最も疲勞せしめ、墮落せしむる種類の勞働を免れしめ、賃銀著しく増騰し、教育普及進歩し、鐵道及印刷機械は四方に散在する同業者間に連絡團結の道を開き、共同一致の運動によりて、其地位を上進するの機會を與へ、智力を要する多き種類の勞働に對する需要増し、其結果高等なる勞働者階級の數大に増加して、今日に於ては不精練勞働者の數を凌駕するに至り、從て勞働者の大部分は、必ずしも之を目するに下層階級を以てすべからざるに至り、間々高尚なる生活營む者を生じ、之を前世紀の上流社會の大多數に比するときは勝ることあり

とも劣ることなき者すらなきにあらず。茲に於てか社會の人間悉くが貧乏の苦痛と過大なる機械的勞働とより來る墮落の影響とを少しも蒙るなくして文明的生活を營むの機會を平等に有するに至らんこと可能ならずやとの思想は單一の理想たるに止まらずして、着々實際上に重要を得んといし現今此問題に對する熱心は彌々加はりて、普く有識者の考究を促せり。

固より此問題は獨り經濟學のみに依りて解決し得べきものにあらず。其の解答は人類本來の道德的・政治的能力如何に係るものにして、是等の點に就ては、經濟學は研究の材料を特に有するなく、他の學者のなす所に倣ひ、并に自己の全力を盡して推論を試むるの外なきなり。然りと雖も此問題の解決に要する事實并に推論の大部分は經濟學研究の範圍内に屬するものにして、經濟學研究の最高最重の趣味は實に此點に存すと云ふ可きなり。

斯くの如く人類の幸福安寧に至大の關係を有する問題を研究する學問なる經濟學は、各時代を通じて其最大思想家多數の注意を惹き、從て今日に於ては、已に圓

熟の境に到達したるものならんを惟ふものなきを保せず。然るに事實は之に反して、從來經濟學を以て専門の業となせる學者の數は、其事業の困難なるに比較しては、甚だ少數にして、之が爲めに經濟學は今日と雖も未だ甚だ幼稚なる状態にあるを免かれず。思ふに、經濟學が人類の高尚なる安寧に斯くの如く深重の關係を有するものなるを看破するもの尠なかりしは、其一原因なるべく、富を研究の目的とする學問は、高尚なる思想上の進歩に専心銳意して身自ら富を得んどの念を有せざる學者に取りては、一見不快の感を與ふるは免れ難き所ならん。然れども、經濟學不進歩の原因は他に更に大なるものあり。即ち近世の經濟學が主として研究の題目とする産業生活の状態、生産分配、消費等の問題は、極めて最近時に發生せしものなること是なり。是等の問題たる、其外觀に於ける程の變遷は、實質上は是れ無かりしは事實疑ふ可からずして、近世の經濟學理は進歩の後れたる人類の状態にも適用し得らるゝこと、皮相の觀察者が思ふ所に勝るもの多々之あり。然れども、多くの異様なる形態を一貫せる實質上の統一は、之を看破すること決して容

易の業にあらすして、前代の學者が苦心慘憺して殘せる研究の結果を充分に利用せずして已むは、何れの代の學者にも免れざる所なり。蓋し近世の經濟生活の状態は之を古への状態に較ぶれば、遙かに複雑を極むと雖も、また同時に多くの點に於て、遙かに精確の度を加へたるものにして、殊に營利上の行爲が他の生活關係と離れて判然殊別せらるゝこと多きを加へ、個人の他人并に社會に對する權利は、古よりも遙かに嚴格に分界せられ、就中習慣の束縛を脱却し、及び自由行動、深謀遠慮并に活動的企業の發達したるにより、各種の物と、各種の勞働との相對的價値を支配する原因を精確顯著ならしむること甚だ大なるものあり。

今斯くの如き變遷を經來りたる近世の產業生活の特色を擧げて之を競争の一事に存すとなし、現時の經濟生活の古への經濟生活と分つ所以は、其競争的性質の著しく加はりたるにありとせず者多し。然れども是れ到底皮相の見たるを免かれず、競争なる語の精確なる意義は、人と人とを角逐せしむるにありて、經濟上に於て競争と云ふときは、物の賣買に方りて角逐することを意味するものゝ如し。今

斯くの如き角逐は之を昔日に比すれば遙かに強く、速かに普きに至れるや疑なしと雖も、今は近世產業生活の根本的特色にあらすして、之に伴ふ結果否近世產業生活の根本的特色に偶發的なる結果と看做す可きものなり。然らば此近世產業生活の根本的特色なるものは何ぞやと云ふに、之を簡單に言ひ表はす可き成語なきを憾まざるを得ずと雖も、要するに、或種の獨立并に、各人が各人の行動を自ら選定するの習慣、自治、自願の行爲、人が世に處するに當りて、深く思慮を廻し、一事を定め、一物を選ぶこと敏捷にして、克く時宜を過たず、將來を豫測し、遠き目的を定め、之に向て自己の行程を定むるの謂に外ならざるなり。斯くの如き獨立自願の行動は、往々にして人と人とを相競争せしむるに至るべく、又實際に於て兩者の相伴ふを見るも雖も、他方に於ては、事の是非は兎に角、人々を驅りて相協業し、相團結せしむるの傾向を有するものにして、今日に於ては此傾向は着々として事實の上に現はるゝなり。但し、此の共同所有并に共同的行動の傾向は之を昔日の共同主義と混同す可きにあらず。故如何と云ふに、古への共同所有、共同行動は一に習慣に、官從

するより起れるものにして各人に獨立自治の念なきが故に、所謂御多分に洩れぬと云ふに過ぎず。之に反し今日の共同主義は、慎重なる思慮の結果、各人が其目的を達する最上の方法として、自由任意に選定したるより起るものなり。即ち此二者は形同しくして其實相異なること、天地霄壤も嘗ならざるものと云はざるべからず。

從來學者が使用せる競争なる語は好ましからざる聯想を伴ひ、一種の利己主義他人無視主義と同意義に解せらるゝものゝ如し。今日の經濟生活に於ては、古への經濟生活に於けるよりも、周到綿密なる利己主義の行はるゝは事實なり。然れども之と同時に又古へに比して遙かに周到綿密なる非利己主義の行はるゝこと之を否むべからず。されば今世の特色は利己主義の増長したること、存せずして周到綿密の用意の發達したること、一事にありと云はざる可からず。例へば古への社會に於ては家族の範圍は習慣上甚だ廣汎にして、隣人に對し種々の義務を存すること今日の比にあらす。然れども亦同時に外邦人を甚だしく敵視するの習慣

あり。之に反して近世の社會に於ては、家族的愛情に基く義務は古へに比するときは、其範圍の遙かに狭きを加へたると共に、其強さに於ては、到底古への家族内に於けるが如き比にあらす。隣人に對する複雑なる義務は消滅せると共に、外邦人と雖も必ずしも之を敵視せず、之を隣人と同等に取扱ふに至り、之に對する公平正直の標準は、或は昔日の社會に於ける隣人に對する標準に比しては、低かるべきも古への人の外邦人に對する標準に較ぶれば、遙かに其程度を高めたり。されば昔日と今日との差異は隣保間の關係緩み、之に反して家族の關係は、多くの點に於て遙かに強くなれるものと云ふべく、家族的愛情より起る獻身的克己の行爲は、古へよりも遙かに進み、殊に外國人に對する同情は、周到綿密なる非利己主義を發揮せしむること、昔日の社會に於て見る能はざるものあり。近世競争主義の誕生地たる國ころまた慈善事業に最大の貢獻をなし、南印度諸島に於ける奴隷の自由を購ふが爲めに二千萬磅を費したるに非ずや。何れの時代に於ても詩人并に社會改革家は現代を洩季の世なりと貶し、古への英雄豪傑の徳行を稱揚して、時人を刺戟

し高潔なる生活を營みしめんと勉むるを常とするものにして、今の昔より勝れる所以を特に掩ふは己むを得ざる所なれども、公平冷静之を歴史に徴し、進歩の後にたる種族の觀察に照すに、今人は古人に比して剽薄を加へたるものにして、古人が他人の利益の爲めに自己の幸福を犠牲に供するを好むこと、今人に比して遙かに勝れりと彼等の説くは、到底維持すべからざる謬見なりと斷言せざるを得ざるなり。精神上何等の發達を見るなく、從て近世産業的企業心を有せざる民族の間にありては、隣人を待つ、誦詐權變甚だしきものあり。不幸者の窮境に乗するに於て容赦無きこと東洋の殺物商人、并に金貸業者の如きもの歐洲諸國中果して何れにありや。固より近世經濟生活の發達と共に、商業上に於ける不正直の範圍の擴張いたるは疑を容れず、人類の智識進歩すると共に、外形を脩飾して人目を眩惑する方法の發見せられたるもの尠なからずして、賤造の方法亦甚だ巧妙を加へたるは事實なり。其故は今日の進歩したる經濟社會に於ては、生産者と消費者との距離は著しく隔絶して、生産者は其製品の何れに赴くやを知らず、消費者は其購ふ所の

物質の何れの人によりて生産せられたるやを知る甚だ難きが故、生産者の非行は直接に消費者の爲めに發見せられ、其叱責を受くること無きに至れり。古へに在りては之に反し、生産者と消費者とは常に同一地に住し、朝夕相見るを常とするが故に、生産者の詐欺不正直はまた直ちに自家の頭上に不利益を呼び來るを常とす。然るに今日は奸騙なる所業を爲すの機會遙に増加したり。然れども此機會を利用すること昔日よりも今日に於て多しと思ふ可からず。近世商業上の取引は誠實の習慣を要すること、并に不正直を行はんとするの傾向を抑ふるの力を有すること、進歩の後にたる國民に於けるよりも遙に大なり。眞誠誠實の風は何くに行くも多少は存すと云ふも文明國人が近世的の産業を進歩の後にたる國民中に創めんとするに方りては、其業を可か責任ある地位に土着人を置き、之に信頼する甚だ困難なるを感ずること多し。又歐羅巴中世に於て商業上に詐欺賤造の行はれたること實に甚だしく、殊に當時斯くの如き惡事を行ふは甚だ困難なりし事情を思合はすときは、尙更以て驚かざるを得ざるなり。されば現時の産業生活の特色を

言ひ表はすに競争なる語を以てするは甚だ穩當を缺くものと云ふべし。吾人は善惡共に道徳上の性質を含むことなく、獨立自治の習慣、深謀遠慮、自由なる選擇を以て精神とする現象を言ひ表はす可き語を要するなり。今此事實を表はすに一言を以てする能はざるが故に、姑く「産業の自由并に企業」又は「經濟的自由」なる語を以てせんと欲す。蓋し中らずと雖も遠からざる可し。此慎重にいて自由なる行為選擇は其目的を達する一方法として、協業若くは團結の事に出づるべし。此場合に於ては個人的自由は制限束縛を蒙るに至る可し。此慎重なる考慮の結果として起る團結の主義が如何なる程度に於て、個人の自由を奪ひ、又如何なる程度に於て一般の安寧を増進すべきかの問題は、篇を改めて更に研究すべし。

終りに第一編の結構を一言し置かんに、先づ第二章并に第三章に於ては、古へより今日に至る迄の産業變遷の概要を示し、以て以下説明の準備となす。其意は經濟史の大綱を提げて、之を要言せんと欲するにあらず、只産業の自由并に企業は、古へより今日に至る間に如何に發達し來り、今日に至りて如何なる程度迄到達せる

かを示すを以て主眼となすものなり。第四章は以上の經濟生活の變遷に伴て、經濟的思想が如何なる發展を遂げしかを示すものにして、殊に最近百五十年間に重きを置きて説明を試みたり。是亦經濟學史の要領を盡さんと欲するの趣意にあらずして、單に今日の經濟學が如何なる地歩を占むるものなるかを了解せしめんと欲するのみ。而して以上三章の根本の思想は、經濟生活は決して一定不變のものに非ず、絶えず進化發展の行程上に在り、此經濟生活に關する學問なる經濟學も、亦一の生命の學にして、之を自然科學に準じて云へば、機械學に屬せずして、生物學に類するものなるを示さんとするにあり。第五章及第六章の目的も亦此の外に出でず。經濟學者が研究の範圍并に制限等を明にし、其研究の目的に對する態度を要言するにあり。以上五章は全卷の總論と見るべく、決して之を以て盡きたりと謂ふにあらず。皆後に至りて詳論を要するものたるや言ふまでもなし。

補論

本章は必ずしも経済學の定義を與へんとするものにあらずして、單に大體の上より其研究の着眼點を概言したるものなり。即ち從來の經濟論が只管富の研究と云ふ事のみ重きを置きて、却て人間の學問なるを忘れたるが如き意見を劈頭第一に排斥し、經濟學は致富の方法を講究せんとするものにあらずして、社會を構成する凡ての階級に其精神上の發達の物質的基礎を充實せしむるを以て、最重の職分となすものなる所以を明かにするを趣意とするものなり。此點先づ最もマーシアル氏苦心の存する所にして、氏の學說の最も進歩せるものたる所以なり。ロツシアーが經濟學の出立點も到着點も共に人間なりと、其經濟全書の開卷第一頁に喝破したるものと同工異曲に出づるものと云ふ可くして、却て之に勝るものありと云はざる可からず。仔細は、ロツシアーの如く、單に人間の學問なりとのみ云ひて、富に關することを云はざるは、舊來の學者が單に富

の學問なりと云ひたるに等しく、偏頗の謗を免る可からず。經濟學は人間と富との關係を研究するものなりと、マーシアルの説くは、兩端を收め得て、克く其真正の性質を盡くしたるものなり。而して、其關係は、單に富の多少を云ふにあらず、人間に他のより高き發達、より貴き活動を得せしめんが爲めに必要なる物質的基礎を均等に與へあるや否やを意味するものなりとしたるは、從來の學者の獨り自ら高しとするに反し、克く經濟學の真正なる地位を道ひ破りたるものにして、其態度の謙遜にして自ら持するの穩健なる、自ら清風一陣胸裡に湧き來るを覺へずんばならず。新派と云ひ、歴史派と云ひ、倫理派と云ふも、其根本の思想は決して此以外に出づるものにあらずして、現今斯學の最も高き立場を示して餘蘊なきものと云はざる可からず。さればマーシアル氏の言外の真意を能く玩味せば、學者經濟學に従事するに於て誤りなき津梁を得るものにして、區々文字の末に拘泥し、其片言隻語を捉へて批評するは、學究に普通の常弊とは云ひ乍ら、惜みても猶餘ある事なり。況んや、此章を以て、獨逸學者一流の一字一句の構

造に腐心する定義の類と看做すものをや。此の如き種類の學者はマーシアルが劈頭の數行に於て、聊か定義類の言を成したるを捉へて、非難するもの多し。これにはマーシアル氏も亦多少の責なきにあらずして、氏自らも之に氣付きたるか聊か字句を訂正したり。即ち第一版及第二版に於ては、

Political Economy, or Economics, is a study of man's actions in the ordinary business of life; it inquires how he gets his income and how he uses it.

「經濟學は人生の日常業務に於ける人間の行動を研究するものにして、彼が如何に其所得を得、並に之を用ゆるかを論ずるものなり」と云ひたるを改めて、第四版には、

Political Economy or Economics is a study of mankind in the ordinary business of life; it examines that part of individual and social action which is most closely connected with the attainment and with the use of the material requisites of well-being.

「經濟學は人生の日常業務に於ける人類を研究するものにして、安寧なる存在

の物質的要件の獲得並に使用に最も密接に關係ある個人的及社會的行動の部分に吟味するものなり」

とせり。前の措辭の不完不備なることは言ふまでもなき所にして、金井博士が其著社會經濟學に於て之れを指摘せられたる如く、「一箇人のみを眼中に置き有機體としての國家社會を度外視するもの」同書一四二頁とせらるゝの虞あり。但し此一條に續く次の説明を見れば、マーシアル氏は經濟學を以て單に個人の行動に限れるものとするにあらざるや明白なり。後の改正後の措辭も亦全く國家社會を眼中に置かずとの非難を辭し難きに似たれども、「人類」と改め、「個人的並に社會的」と重言したるを以て、大に面目を改めたるものとするを得可きなり。然れども此條は改正前と後とを問はず一字一句抜き差しなき定義の類と見る可きものにあらざるは、全章の結構に照して極めて明瞭なることなり。之を英國流の不精確と云はゞ云へ、經濟學の如き學問にありては、獨乙流の字句に一々重要を繋ぐ説明法は、却て人を過るの恐あり。ワグナー氏を始め獨乙學者が、

經濟學の定義なりと確言したるもの、何れも嚴格なる批評に破られざるものなきを以て悟る可し。〔此事は拙著國民經濟原論に論及しあり、就て見る可し。又同經濟學研究收むる所の論文中屢々評論を試み置きたり、併せ讀む可し。〕專らマーシアル流に輪廓のみを施して、内容を束縛せざることを趣味多けれ。兎に角マーシアル氏の此一條は其心を以て判す可きものなり。

今斯く大體に於て解釋して、マーシアル氏が經濟學の性質なりと説く所を見れば、其真意の存する所は何れの學者も必ず首肯するの外なき所と云ふ可し。唯其の經濟學の學としての職分と、術としての職分、言ひ換れば純理論と政策論とを聊か混同するの嫌あるは争ひ難き所にして、此點は後に至りて再び論究を要すること、言ふまでもなき所なり。

マーシアル氏が本章に於て主張する要點は二あり。一は社會大多數の向上の急務にして、二は近世經濟生活の特色は競争に存せずして、深謀遠慮即ち *Prudence* に在ること、是れなり。而して此兩者を一貫する根本の精神は、人格の

尊貴を認識するの一事にして、此に關する氏の論述は、一に敬服の外なき所なり。氏が斯く僅々數言を以て、平易に説き去りたる妙は、誠に擲す可く、他の佞屈難達なる學究的論辯の企て及ばざる所と云ふ可し。唯々聊か大體論に過ぎず、社會大多數の向上は、狭く低き經濟論のみの立場なる、生産力増進の必要の上に於ても亦た急務なることに説き及ばざるは、誤解を惹き起すの虞なきにあらず。社會中貧民を存するの弊は、單に經濟的利害の上より打算するも、明々白々疑なき所以を併せ説かざれば、經濟上の論と經濟以上の論との區別を曖昧に陥らしむるの虞あり。讀者本章のみを捕へて輕々に論定すること勿れ。之に反し、競争を以て現在經濟生活の特色とするの淺見にして、競争は却て偶發的結果に外ならず、現に經濟生活の最も進歩せる國々(殊に英國)に於ては、却て着々新組織主義の昔からんとする由を説く所、一言増減の要を見ず。此點は先づ深く之を味ひ置く可きものなり。終りに本章と併せ見る可き參考書の一二を示さんには、

尤も

Cohn, Grundlegung der Nationalökonomie. Stuttgart. 1885.

に就て、其第四十八節以下七十二頁以下「經濟と倫理」論を讀む可し。言反對に出でて、意は即ちマーシアル氏と相合するものなるが故に、其短を補ひ其長を採るに最も便あり。

次に倫理學者の經濟論を参照す可し。即ち

Wundt, Ethik. 3. A. Stuttgart. 1903.

の第二卷三百六頁「所有及經濟團體としての國家」及三百五十頁「經濟上の國際交通」を始とし、

Dilthey, Einleitung in die Geisteswissenschaften. Leipzig. 1883. (新本なき故舊版に據る)

の第一卷四百九十一頁以下殊に「實際と理想との撞着。形而上論の打破」の條を見て大體に通じ、更らに

Höfding, Ethik. 2. deutsche A. Leipzig. 1901.

の三百五十六頁乃至四百二十頁「物質的文化」の章を

Paulsen, System der Ethik. 5. A. Berlin. 1900. (予の蔵する此本或は舊版ならん)

の第二卷三百十四頁乃至五百十一頁「經濟生活及社會」の章を以て就て彼等現在の立場を知り、之を經濟學の説く所と併せ考ふ可し。然る後再び經濟學者に戻り來りて先づ

Kries, Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. 1883.

の百六頁より百四十一頁を讀み次に

Ratzinger, Die Volkswirtschaft in ihren sittlichen Grundlagen. 3. A. Freiburg i. B. 1881.

によりて一派の見解を確かめ轉じて

Schmoller, Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. Leipzig. 1900.

の六頁以下七十四頁までを涉獵し更らに同書第二卷四百九十六頁乃至五百五十七頁の「階級争闘」の條を對照す可し。

ロマンターの説は

Roscher, Grundlagen der Nationaloekonomie. 22. A. Stuttgart. 1894.

の初二章に就て窺ふ可し。

ワグナーは其

Wagner, Grundlagen der Volkswirtschaft. Leipzig. 1892.

の一頁乃至二十五頁、八十三頁乃至百三十六頁に獨特の所論を説きあり。

ブレントノに就ては先づ

Brantano, Arbeiterversicherung gemäss der heutigen Wirtschaftsordnung. Leipzig. 1879.

Brentano, Die Klassische Nationaloekonomie. Leipzig. 1888.

の二書に據りて研究す可し。

英國學者の中最も進歩したる立場より從來の學者を評議したるものは

Boyar, Philosophy and Political Economy in some of their historical relations. London. 1893.

を推す可く、此書によりて發展の大勢を知りて後始めてアダム・スミスの有名な「道徳感情論」に及ぶ可し。即ち左の如し。

Adam Smith. Theory of moral sentiments. (他に良版を藏せざるにより Bohm's Standard Library. London. 1880. 本に據る)

第六篇第一、二、三部自三〇七頁乃至三八五頁を同じ人の Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. (キアナン版に據る)

の三百五十五頁乃至三百九十四頁「各國の富有の異なる進歩」の條及其全篇の所論と對照克く玩味して其真意を捉ふるを勉む可きなり。

邦書にては左の數氏を参照す可し

金井延氏「社會經濟學」百三十五頁 氣賀勘重氏「フネリッポグキッチ經濟原論」拙著

「國民經濟原論」五九—六六頁

昨千九百九年英國政界の大問題となりたる「養老年金制度」はマ氏の本章に説く思想の漸く一般に認められたる一現象と見る可く、又貧民法調査委員の報告に於ても此種の思想の識者間には認められんとする有様を看取するを得可きなり。猶此問題に就ては Murchhead. By what authority? 1880. あり、甚だ要を得たる書なり。

第二章 産業の自由并に企業の發達

凡そ歴史上の重なる出来事は其直接の原因を個人の行動に有するや言ふを待たずと雖も、遠く其因て來る所を察すれば、多くは古來より存續する社會上各般の制度、人種的特質及外界の自然の影響等に胚胎するものにして、其中人種的特質なるものは、亦た或は遠き、或は近き過去に於ける個人の行動と、物質的影響との結果に成るもの多く、優等人種として知らるゝもの、多くは身體精神共に卓越せる祖先を有したるものにして、軍事に勇敢なると平和の業に卓越するを問はず、共に均しく、英雄の士在るありて、直接間接に其同胞を教へ、之を指導し、其の法規其の習慣を定め、又は發達せしめたるの効に依るものなり。然りと雖も此等偉人の感化も之を助長するに適應せる氣候の影響を缺くときは、また其作用を長く持續すること能はず、されば一人種の性格を形成し、其政治的、社會的、制度的に特色を附與するものは、山川、風土の賜なりと云はざる可からざるなり。

然れども此等氣候の影響は人類が蒙昧の境遇に在る間は未だ著しきことを得ず、其の特に顯はるゝは人類が文化の發達に於て向上の一步を進むるの後に在るなり。固より吾人は所謂自然民族なるものに就て知ること甚だ尠く、其儘かに知り得る所、また極めて不精確なるを免れずと雖も、大體に於て之れを見れば、自然野蠻の民族の狀態千差萬別なる中に、自ら其全體を一貫する統一一致の點あるを認めざるを得ず。凡そ氣候の寒暑の如何を問はず、其祖先の何人に出づるに論なく、野蠻人種は均しく習慣并に本能の爲めに專制せられ、自己の創案を立て、將來を豫測するが如きことなく、近き將來に向てすらも殆んど何等の貯蓄を備へず、一に全く習慣の奴隷たるに止り、本能の命する所を擅にし、時ありてか最も困難なる勞働を辭せざるかと見れば、一度始めたる業を永く持續して營むの忍耐を有せず、卒然として之を捨て、顧みず、概して困難の多く疲勞を來たすが如き業は、勉めて之を避け、其の已むを得ざるものは、婦女を強制して之に當らしむるを常とするなり。（此點は拙著「經濟學研究」第五篇翻譯中に收録せるブエヘル氏の經濟進化論の項に據

説しあり、就て見る可し。）

故に天然包圍の力が人類の上に及ぼす影響を最も著しく見るを得るは、斯くの如き最低蒙昧の狀態より進んで、稍文化の道程に上ぼるに至るに於て、始めて之ありと云はざる可からず。是れ或は最低民族に關する吾人の知識甚だ乏しくして、從て其生活狀態の變遷を察し、其真相を極むること能はざるに由るなる可しと雖も、其主たる原因は、最低度に停滯する人類は、天然に打克つのかに乏しく、天然の庇護を離れては何事をも營む能はざるに存するや、疑なし。而して、人類が野蠻蒙昧の域より脱して稍々文明に進むを得たるは、天然包圍の事情甚だ寛にして、克く之れを促かすに預て力ありし處に限れり。斯くの如きは地球上唯數ヶ所に止り、此數ヶ所に於ては天然の賜甚だ豊富にして、克く人類をして、其域を進めて文明に向はしむるに、指導監督の勞を惜まざりしに依れり。（天然包圍の民族性格に及す影響殊に其主要産業を左右するの作用に就ては、クニースの「史觀經濟學論」、ヘーゲルの「歴史哲學」バックルの「英國文明史」等を見る可く、又アリストテレスの「政治

論「モンテスキューの『法の精神』を併せ讀む可し。」

最低度の文明と雖も、苟くも人類の努力が、其生活の必需品以外に、多少餘裕を生ずるを得る所にあらざれば、起ることを能はず。餘裕の富は文明を養ひ育つる食料と云ふ可きなり。倉庫實て後禮節を知ると云ふ如く、物質上の生活に多少の餘裕ありてこそ始めて精神上の進歩を促し來るものなれ。人類文化の發祥地は皆熱帶地方に存すること此理に外ならず。熱帶地方に於ては生活に要するところ甚だ少く、寒氣に堪ゆる爲め脂肪性食料を取り、厚き衣料を被むるの必要を見ず、單純なる食と衣とを以て優悠するを得、他方には天然の人類に附與するものは甚だ豊富にして、樹木茂り果實充てり。然れば生活を維持するの外自ら綽々として餘剩を存するや言を待たず。殊に熱帶地方の中、大河流の邊りは大なる原始的文化民族の發生したる所なり。河流は土壤に充分の濕度を與へ、灌溉疏水の爲めに勞するの要を省き、四通八達なる其水路は幼稚なる民族をして猶且つ容易に相交通するを得せしめ、有無相通じ、四方に相交るに多大の便を供したるが爲めなり。而し

て此等の原始文化民族を統治する主權者は、多くは其地土着の人にあらずして、遠方の寒地又は近き山地より新たに移住し來れる異種人なるを常とす。其故は温暖なる氣候は人間を懶惰ならしめ、其活動力を殺ぐものにして、一民族を統率して之に君臨するの智力活力は寒き氣候に陶冶し、養成せられたる剛健の人種に待たざるを得ざるが爲めにして、移住以後數代の間は其活動力を持續し、其臣民の勞働の産物に衣食して、奢侈なる生活を營むを常とし、質朴なる郷國に於て知る能はざりし、暖國の優勝なる文化を同化し、其産物を吸收し、其智識其技能に於て、間もなく新征服民たる臣民を凌駕するに至るなり。概して之を云へば、智能上の能力性格は此等少數の上流階級の間止り、人民の大多數は全然之を關くものなり。其主たる原因は氣候の温暖なるにあり。蓋し温暖なる氣候は、風に文明を發生せしむるの力あると共に、また早く之を衰へしむるの止むを得ざるものなり。(モンテスキューは『法の精神』第十四卷第二章に於て、寒き氣候は住民に勝れたる力を與へ、其結果として、他の民族に對して自己を優等人種なりと信ずるの念を強くし、之が爲め、野

蠻民族に普通なる復仇的精神を滅じ、自らの地位に安ずるの心を高め、從て、快潤率直の風を養ひ、邪推、誑詐、陰險の性を脱せしむるものなりと云へり。斯くの如きは經濟的向上進歩に預て甚だ有力なるや言を須たす。蓋し寒き氣候は人間の活動力を刺激すると大にして、人類の最も幼稚なる状態に於ては、寒き土地に於ける生活の困難は實に甚しと雖も、一度智と富との増進するに及べば、生活の餘裕あること、反て暖國に勝るを常とす。殊に峻烈なる風霜を防ぐの必要上、廣大にして堅固なる住居を築き、之あるによりて、家族的團樂の樂を増し、社交的會合を助成するを得るなり。熱帶地方に於ては如何に勤勉力行せんと欲するものも、暑熱甚しきが爲高尙なる智能上の活動を發揮せんこと誠に難く、持續的勞働と兩立すること殆んど全く不可能なり。されば嘗て寒烈なる郷國の天然に養はれたる清新剛健の氣象を廣らし來りて、熱帶地方に君臨するに至れる統治者の階級も、永く溫暖なる氣候に包容せらるゝの結果、昔日の特性を失ひ、加ふるに奢侈の中に優悠するによりて、漸次墮落し、其極再び新しく寒國より侵入し來る他の優等人種の爲めに征服せ

られ、間々中間階級を成すものなきにわらずと雖も、其多くは全然寒を最下層階級に列し了るに至るなり。(現在文明諸國に於て統治階級の多く北方人種にして、南方人種は征服民なることを考へ見る可し)。

今斯くの如き程度に於ける文明に就て研究することは、哲理史學者の立場よりしては趣味少からざる可しと雖も、經濟學者の立場より之を見れば、斯くの如き文明の状態に於ては一般に經濟的活働(勞働)を蔑視すること甚しく、其經濟生活を支配するものは、一に習慣あるのみにして、適々暴君の壓制を防ぐの用をなすもの、亦た習慣の保護あるに由ると云ふが如き状態なるを以て、特に經濟的と稱す可き現象起るを見ず。蓋し習慣とは、壓制強迫の結晶態とも見る可きものにして、強者が弱者を凌げ得る範圍を限定するが爲めに、持續するものと云ふ可し。然れども、一に全く弱き下層民を壓抑し去て寸毫も顧慮する所なきが如き習慣は決して永續する可し。何となれば弱者を單に壓制するのみにして、之を保持し、其經濟上の力を維持することなければ、其民族は、久しからずして消滅に歸す可きは理の暗

易き所なればなり。されば如何に野蠻蒙昧の民族と雖も必ず其習慣の中弱者を擁護し其存在を維持す可き道は亦た自ら徭らざる可き道なし。(此事はベヂオット其著「物理學と政治學」に於て已に論じたることあり。スベンサー及メーソンの諸著併せ看る可し。)

企業の全然存在せず競争の行はるゝことなき處に於ては、強者に對し并に同胞の非行に對して弱者を擁護するものは習慣にして習慣を神聖と看做すを常とす。斯くの如き社會に於ては習慣を打破して新事を創むるものは、一の潛神者といふ全民族の仇敵として排斥せらるゝを免れず。故に經濟的原因の影響は掩はれて表面に現はるゝことなしと雖も其の潛勢力は半乎として抜く可からず、狂く可からざるものあるを忘る可からず。皮相なる觀察者は近世の社會に於けるが如く顯著敏活の作用を見ざるを以て、多く之を度外に附すと雖も其は認れるの甚しきものと云はざる可からず。而して原始の文明社會に於て、個人的所有權の甚しく制限せられかゝることは畢竟するに此の習慣の勢力の原因に於て又た其結果たる

ものなり。凡ての所有就中土地所有に對する個人權は、昔日の家井家族の有せる權利に其源を發するものにして、其初めは家井家族の權によりて甚しく制限せられあり又多く之に従屬の關係を有したるものなり。而して家井家族の權利はまた村落の有する權利に對して從屬關係に立ちたり。村落は畢竟家族の擴張し發達して起れる共同體に外ならざることは事實上或は必ずしも證明し難き所なる可しと雖も傳説の上に於ては常に爾か看做されたるものなり。從來學者は人類文化の痕を尋ねるに専ら意を國家政府の上に注ぎ、其變遷消長のみを重きを置き、經濟上の發達を研究するには主として政府と經濟生活との關係の方面に着眼するに止り、反て實際上至大の關係ある共同所有制度の經濟上の發達に及ぼせる影響を度外視せり。其不當なること元より論を待たず。

原始文明の社會にありては、一般普通に行はるゝ習慣を打破するの勇氣大膽を有するものゝ少かりしや當然なり。たゞへ個人的所有權の認められ其權限の確定することありとも、新事を創り新案を立てんと企つるときは、直ちに全社會の嫉

親を受くるを覺悟せざる可からず。されば極めて勇敢なる精神を有するものか之れを敢てい得可く其之を企つる極めて徐々たらざるを得ず。習慣の勢力の漸次減少し牽制束縛の力緩みて個人的自由の曙光を見るに至れるは此等敢行果斷の人の賜なり。然れども其業の困難なりしこと實に名狀す可からざるものあり。家長は單に全家族財産の保管者たるに過ぎずして全家族員の協議を待つにあらざれば小事と雖も新たに起すことを得ず。個人の行働は一に全く家族なるより大なる個體の爲めに束縛せられ而して家族の上には又た村落の團體ありて耕地専用の權は家族に存するにしても所謂一村共同の強制耕作の習慣存し一村内の住民は必ず常に同一時に同一事を營むを要し殊に分圖制の行はれ斑田法によりて輪耕する處にありては休耕の番に當れる耕地は全村共用の牧地として用ゐられ耕地も亦輪番に轉換するを要したるが爲め到底個人的發意と活動との起る可き由なく各家各人は皆極めて煩瑣綿密なる共同規約によりて牽束桎梏せられ自由企業の發生は永く之を見るを得ざるなり。

從來學者は習慣の重要を輕視したるにあらざると雖も其論ずる處多くは物價貨幣地代等に於ける關係のみに止まりて反て習慣の影響を最も見る可き生産形態經濟組織との關係に意を用ゆるものなし。物價貨幣地代等に及す習慣の影響は一見甚だ顯著なるものありと雖も其作用は此に止りて他に波及すること尠し。然るに生産形態并に經濟組織に及す習慣の作用は暗々の裏にありて反て至大至重なるものあり殊に其影響は積層的に他に波及すること深く而して間斷なく同一方向に働くが故に表面に現はるゝ作用の到底比し得可き所にあらざるなり。習慣の勢力の大なる實に斯くの如し。然れども人類進化發展の行程は已む時なく終に其束縛を打破するの勇氣を具備したる民族の起るを止むる能はず。是れを希臘羅馬兩民族と爲す。

希臘羅馬兩民族の一般文化の上に殘せる大なる事業は、茲に解説するまでもなし。否、經濟學の方面より云へば、斯くまで偉大なる發達を遂げたる此兩民族が經濟上今日吾人が最重要なりと認むる問題の社會的方面を知る少く、又之に意を注ぐこと乏しかりし一事は、偶々奇と云はざる可からずして、其原因を研究すること却て最も興味あり。

希臘人も亦た他の古代文明民族と同じく、峻烈なる氣候に育てられ、永く生活維持の爲めに奮闘したるの後、漸次温暖なる地方に移住し來りて、優等民族として顯はれたるものにして、ダニユープ河を越へて南下し、地中海の濱、山岳起伏し、港灣出入する一小地に居を定め、山に圍まれ、海に包まれ、其の安固にして交通の便多きを利用して、茲に一大文化を形成したり。波の打寄する處は亦た文明の起る所なり。希臘の文明は海の齋らせる所と云ふも太過なし。海の空氣は自由の空氣なり。清新潑潑たる希臘の思想は、此空氣を呼吸したるより起る。海は希臘人に智識を與へ、自由を與へ、習慣遺傳の束縛を脱却するの活力を與へ、其温暖なる氣候は彼等

をして生活維持の爲めに意を勞し、體を疲らすを免れしめ、而も地中海の海風は其活力を絶へず清新し、永く衰ふることなからしめたり。晝は燦くが如き太陽を包む深き青空の下、夜は清涼身を浸す水の邊、希臘の才人名媛は其豊富なる創造の力、其卓越なる想像の才を專にし、燦然たる文明の精華を啓き、多くの點に於て後代の到底企て及ばざる完美の果を結びたり。然れども、希臘の文明は、一點に於て、現今の文明の要素たるものを飲み、何ぞや。人の人としての權威、人格の尊貴を悟るに及ばざりしこと、是れなり。是れ其文明の大缺陷にして、曠世の大思想家プラトーンの如きを以てして、尙且つ奴隸制度を以て天の命ずる所なりと説くあり。只管向上の一路あるを見て、顧みて多數階級の如何なる状態にあるかに心をを用ゆることなく、殊に經濟的活動を以て奴隸に一任し去り、産業生活を蔑視すること亦た甚しく、其結果として吾人が今日最重要の經濟的、社會的問題と爲す所のものに、何等の注意を拂ふことなし。蓋し希臘の天と地との豊富なる、極端なる貧乏を知らず、其の田と其の海とは生活の資料を供して餘あり、奴隸階級と雖も尙文明の恩惠

に浴するの機會を欲かず、從て生活上の休戚に多く意を勞すること無かりしは、其大原因と見ざる可からざるなり。此希臘人の思想の影響を蒙ること甚だ深き後代の學者が、經濟上の問題に冷淡にして、産業上の行爲を蔑視する甚しきは、其因縁淺からずと云ふ可きのみ。

之れを要するに、希臘に就て吾人の學ぶ所は、其滅亡が自由の濫用に胚胎するの一事にあり。恒業なきものは恒心なし、絶へず産業上の勤勉を事とするにあらざるよりは、何れの國民と雖も堅忍眞率の風を欲し、終に衰運を招くは固より免れざる數なり。希臘人は社會的并に智能的に全然自由を享有せり。然れども此自由を善用するの道を過り、敏活明察能く新事物に應ずるの素地ありて、産業的企業に必要な性格を具へたりと雖も、他の要素たる自制克己、堅忍持久の風を欲きたるが爲め、其豊富なる天然其の麗はしき風土は却て彼等の體力を傷ふの基となり、延て精神上の墮落を防ぐこと能はざるに至れるなり。

文明は更らに西漸して羅馬に及べり。羅馬人は之を一國民と見るよりも一大

軍隊と見る可きものにして、産業を蔑にし、經濟上の活働を奴隸に一任し去て顧みざりしこと希臘人に酷似すと雖も、亦多くの點に於て希臘人に異れるものあり。羅馬人は強固なる意志、鐵の如き決意、一事を創むるときは全く他事を顧みざる熱心を以て、其特長となす。(ヘーゲルが「歴史哲學」に論じたる所并に其ヘーゲルの影響を受けたりと見る可きモムセン「羅馬史」中宗教に關する條を見よ。ヘーゲルの歴史派經濟學に於ける感化に就ては、ロツシア「獨逸經濟學史」第百八十八節を見る可く、カウツ「經濟學の發達」第一巻も併せ讀む可し)

羅馬人は經濟的企業に要する凡ての資格を具備したること、軍事并に政治に於けるに劣らず。同業組合制度の發達、奴隸使用、大經營生産、殊に合本組織の發達資本の勢力の大なる、殊に金貨業の甚だ進歩せる、商業上の自由、交通の自由の或る點に於ては今日に勝りて發達せる、實に驚嘆に堪へたるものあり。されば羅馬の經濟狀態は一見今日の經濟狀態と全く相分つ所なきが如きありて、皮相なる學者間々羅馬には既に已に今日の所謂社會問題なるもの存せりと傲すものなきにあら

す。然れども是れ謬見なり。其相似たるは外觀のみ其精神に至ては兩者の差異天地霄壤も管ならざるものありと云はざる可からず。何ぞや。今日吾人が經濟學上最重要の問題とし最大の趣味を置く下層人民の人格の價値を認むるの一舉羅馬の文明に全然闕如せしこと是なり。蓋し羅馬の商業は常に背後に武器の後援ありて繁榮したるものにして其目的は單に専ら金錢上の利益を壟斷するに存し眞正なる經濟上の發達に欲く可からざる誠實周到の風を欲くこと甚しく殊に經濟上に於ける國家の權力絶大無限にして其極私人の企業を全然杜絶するに至れり。斯くて羅馬の文明は直接經濟生活の上に於ては後世に残したるもの多一からずと雖も間接に經濟生活并に經濟學の進歩に貢獻したること甚だ大なり。其は他にあらず羅馬人は非常に進歩したる法律制度を完成し永く範を後世に垂れたること是れなり。殊に羅馬法は契約の制を完備し其範圍を擴め之を精確ならしめ伸縮自在ならしめ大なる力を具備せしめ延て以て個人所有權の確立安固を得せしめたることは其大功績となす可し。個人所有權の發達は今日の經濟

上の進歩に缺く可からざる要件たるや言を待たず。然れどもまた他方に於ては個人所有權より生ずる弊害多々ありて是れ亦羅馬法の賜と爲さざる可からざるなり。蓋し羅馬法は「ストア」哲學の影響成化を蒙ること甚だ大にして權利を伸張すると共に義務の觀念を重する深しと雖もまた同時に厭世的傾向を含むものなるが故に實際生活と義務の觀念と調和すること愈々難きに從ひ又益々不安の情を生せざるを得ず。此時に方り全く異なる根本思想に基ける宗教入り來りて此間に調和を與へんとしたり基督教是れなり。然れども基督教の歐洲に普及したるは其始め甚だ遅やたり羅馬仆れて後長き間西歐諸國は一時暗黒の時代に入るの止むを得ざるに至れり。

羅馬人に代りて西歐文明の繼承者となれるもの二あり。チュートン民族并にサラセン民族是れなり。チュートン民族は習慣の束縛を脱すること甚だ遅く保守の風永く之を支配せり。されば古代文明の後を受けて先づ中世の歐洲に新生面を揚げ來れるものはサラセン民族なりき。殊に經濟上に於ては交通の發達貨

幣經濟の普及等近世的經濟組織の根本基礎を供したるに至ては、其功永く没す可からざるものあり。チュートン民族が永く封建制度の束縛の下に呻吟し、經濟上に於ける自由活動并に企業の發達に於て抑制せられたる間に、サラセン人は着々進歩の行路を辿り、後に伊太利に、ルネサンス文化復興の興れる時、採つて以て模範とす可き幾多の制度を残したるものなり。然れども温暖に過ぎたる氣候、放逸度に失したる宗教は、彼等をして早く活動力を失はしめ、終に墮落の底に消へ去らしめ、今日の經濟上の發達に直接の貢獻をなすことなくして了らしめたり。之に反しチュートン民族は長き間其進歩發達甚だ遅々たりしと雖も、由來堅實持久の性強く、素樸篤實の風と剛健なる體格とを具ふるにより、其文明は深く根柢を歐洲の地に植へたり。

チュートン民族文明の新紀元の始めに方りて先づ最も吾人の注意を惹く現象は都府と國家との軋轢是なり。都府は中央權に對抗して自由思想殊に産業上の自由の主張者として起れり。然るに都府に反對し殊に産業上の自由の伸張に極

力妨害を與へたるもの多々なる中に就て、最有力なりしものに二あり。其一は封建制度にして、其二は基督教會是れなり。

封建制度はチュートン民族の社會的發達に缺く可からざりし一階段なりしこと、殆んど疑を容れず。否、凡そ封建制度が與ふる過渡的、教育時代を経たる民族に、からざれば、到底圓滿完備なる文明を發達し來ること能はずして、一見經濟生活進歩の要求と全然相容れざるが如く見ゆる封建制度の訓育を缺く民族は、今日の最も發達したる經濟的文明の華を啓くこと能はざるは明なる事實にして、此理は獨り西歐諸國に於て然るのみならず、東洋諸國に就ても亦争ふ可からざる所なり。我々が日本が東洋諸國の中獨り歐洲國民に毫も劣ることなき文化的素地を有する所以のもの、亦多く長き封建時代の間接なる賜物と云はざるを得ざるなり（此點拙著「經濟學研究」二百三頁以下に論じたり）。然り、然りと雖も、其時代に於て之を見れば、封建制度は經濟生活の活動殊に企業と産業の自由との發達を壓抑したること亦甚しきものあるや否定す可からず。殊にチュートン民族にありては、封建制度は中

中央権と相結托して都府に對抗し其進退を防ぎたること甚しかりき。蓋し封建制度は土地を基礎とする農業に重きを置き他方には個人的の關係を律するに嚴格なる恩義の情のみを以てし都府の業たる商工業を喜ばず其自由的活動を以て社會の秩序を紊る所以なりとしたるは事理の已むを得ざるに出づる所なり。殊に封建社會は貴族專制の社會に外ならずして從て多數の下層臣民を見る甚だ軽く之を以て單に貴族の用の爲めに存在する機關に過ぎずとなし、武士以外の階級に及んで人格を尊重し個人の自由を認識することなし。故に何れの意味に於ても經濟上の現象を重視せず其の經濟生活に對する態度は一に全く消極的なりと云ふ可し。されば歐洲諸國に於て産業の自由并に企業制度の大に發達するを得たるは封建制度の將さに漸く潰頽し始めたる時ならざるを得ざりしなり。(同上拙著三十八頁以下を見る可し)

次に基督教會の影響を見るに基督教は由來人格の尊貴を説き殊に其初期に於ては下層人民の伴侶となり階級的懸隔を打破せんと勉めたること多く農業上に於ては進歩改良の先驅となりたるの例亦尠からず。然れども概して之を云へば基督教會は經濟生活の進歩を助けたるよりも之を妨げたること遙かに多きに居ると云はざるを得ず。殊に其普及するに至りて後は甚しく厭世的の傾向を帯び來り富を敬視すること甚しく從て之に關聯する經濟上の活動を壓抑したること甚だ多し。加之基督教は其根本教義に於て人格の威嚴を説きたるにも拘らず實際の行働の上に於ては反て屢々封建君主に加擔したるの例も亦乏しからず。只だ後に都府と封建君候との鬭争激烈を加ふるに及んでは羅馬法王が其俗世的野心を滿たすの手段として都府と相結托して君候に當りたるは一見經濟生活進歩の友となりたるかの觀あり。然れども之が爲めに却て都府と中央権との乖離を甚からしめ幾多の無益なる紛擾を醸し出したるの罪は斷じて寛假す可きにあらざるなり。(同書十五頁以下を見よ)

要するに西羅馬帝國滅亡以後十字軍役に至るまでの數百年間は歐洲諸國の經濟上の進歩甚だ顯著ならず産業の自由并に企業の活動の如きは極めて幼稚なる

状態にありしものにして、基督教の爲めに起れる十字軍は、其宗教上の目的に於ては、全然失敗に終りたるものなるに、其の歐洲經濟生活の進歩の上に、新紀元を開きたる功は、また甚だ大なるものあり。而して十字軍役の爲めに開かれたる此新機運は、先づ伊太利に於て熟したり。蓋し伊太利は、十字軍の爲めに新たに西歐に輸入せられたる東方文化の精華を先づ味ひ、歐洲諸國の軍隊は遠征の途すがら必ず伊太利を過ぎるに至り、伊太利は當時の富と繁榮とを集め、其經濟上の活動大に起るを見たり。伊太利の文明は、全然都府の文明なり。是を總べてルネサンス(文化復興)と云ふは、希臘羅馬の文明の再び茲に復活したりとの意なり。然れども其復活したるものは、形態のみ、實質に至ては古代の文化とルネサンス時代の伊太利文化とは、全然相異なるものと云はざる可からず。其故如何と云ふに、伊太利に於ては、個人の自由の伸張したること、古代羅馬に於けるの比に、あらずして、殊に富に對し、經濟的活動に對する思想亦た其根底に於て、異なればなり。伊太利の後を受け、て大に興れるは、西班牙なり。地中海大に興りて、伊太利の全盛を招き、其結果航海

術の絶大なる發達を呼び、終に亞米利加新大陸の發見となりて、茲に大西洋は地中海の繁榮を奪ひ、伊太利衰へて、西班牙大に興るもの偶然に似て然らず。西班牙の漸く衰ふるに及んでは、和蘭の獨立となり、尋て佛國更らに英國の進歩之に凌駕するを見たり。斯くて一消一長、一盛一衰、走馬燈の如く相續て、經濟的活動は其主働者を交代し、其方面は益々擴張し、其進歩は愈々急速となれり。而して其最後に起り來りし英國に於て、産業自由并に企業の發展は完成圓熟の域に達したり。如上の變遷を觀來れば、經濟生活發展の行路の甚だ複雑にして、之を研究するの趣味津々たるを覺ゆるを得ざるなり。然れども之を詳述するは、經濟史の本領にして、本書の企つ可き所にあらず。唯だ其中産業自由企業發展の大勢は、必ず之を記せざる可からずして、此點に於ては、英國は最も吾人を教ゆるに足るなり。次に章を改めて英國に就て、少しく詳述を試みて、更らに此理を明にす可し。

(補論)

本章氣候と經濟生活との關係を論ずる條はモンテスキュー及パツクルに得たる所多し。近來此兩家の所論は一種の極端論なりとて之を非難するもの尠からずと雖も始めて兩者の密接なる關係に人の注意を促したるの功は決して没す可からず。但し此種の研究は狭き意味に解せる經濟學の本領に屬せず、近來政治地理、人文地理、人種地理の學者大に起りて専ら此種の研究に勉め、就中獨乙のラツツエル最も名あり。經濟地理と云ふもの亦た其餘澤を受けて漸く學者の注意する所となれるものゝ如し。シユモラーは其經濟原論第一卷原名前に掲ぐ(自百二十六頁至百三十九頁間に於て「國民經濟と外界自然關係」を説き、關係書目を掲ぐる甚だ詳なり、別に専門の研究を試むるにあらざる學者の参照するには最も便なりと云ふ可し。

次に習慣の影響を論じたるは、近來新學一般の普く認むる所にして、所謂歴史

派の大功績は此點に力を注ぎたるにあり。マーシアルが其經濟史敘述を始めるに最も重きを此に置きたるは誠に當然なり。殊に今日の經濟生活は決して萬古不易のものにあらずして、永き進化發展の結果漸く到達せる一の時期たるに過ぎざるを繰返して説きたるは、最近斯學の立場を代表するものとして、最も細心の熟讀を値する所にして、此章并に次章を顧みずして、直ちに氏の純理論の章に向ふ者は、抑も書を讀むの用意を欠く甚しきものにして、初學の士の爲す可き所にあらざるなり。而して氏の歴史的敘述はまた獨逸學者を襲踏せず、一流獨得の結構を立てたる、甚だ取る可く、殊に獨立自治の發展を中心として、一般の變遷を觀察せしむる、企業發達の行路を以て全體を縱横せしめたるは、ブエヘル氏一度始めて凡ての學者の祖述する經濟形態中心の敘述法と相待て、學者の見解を汎むるの功あるものと云ふ可し。ブエヘル氏は主として財の充用に到達する道行の變遷に重きを置き、自足經濟、都府經濟、國民經濟とし、シュモラー氏は其政治上の形態に標準を取り、村落經濟、都府經濟、領域經濟、國家經濟の四時

期を劃し、フキリップポグキッチ氏は兩者を折衷して、交換なき經濟交換漸く起れる經濟交換普及せる經濟と分ちて論じ、其間聊か異同あるも、共に財の充用の組織團體の形態に着眼したるものにして、經濟行爲即ち財の獲得生産の活動現象を第二位に置きたるものなり。然るにマーシアル氏は英國從來の傾向の影響の下に、主として活動の方面たる財の獲得の現象たる企業及其前提としての産業自由の發展に論を立てたり。以上各多少偏倚の嫌あるを免れず。さればシュモラーは其原論中後に至て企業の發展なる章を別に設けて再論を爲すの必要あるを發見したるなり。思ふに今後の學者は、克く此兩者を調和し、經濟の方面と經濟行爲の方面との二者を一貫せる、史的敘述を勉む可きなり。予は國民經濟原論に於て之を企てんと欲して成らず、僅かにゾムバルトの新説を追録し得たるのみ。故に本章并に次章は必ず之をブエヘル氏以下の所説と相併べて學ばざる可からざるものにして、讀者之を氣賀氏のフキリップポグキッチ原論の翻譯若くは拙著に就て見んことを望まざる能はざる所なり。

終りに本章後半部の希臘羅馬の發達史の説明は甚だ簡に失して要を得ざるが如くなるも其主とする所産業自由并に企業の發達は人格の尊重、個性の伸張なくしては到底望むを得ざる所以を明かにするにありて、其明言する如く、經濟史の要領を道盡さんとするにあらざるは諒せざる可からず。讀者は拙著「經濟學研究」第六百三十五頁乃至六百六十三頁に收録せる「商業政策と商權の消長」を見て聊か其缺を補ふを得可し。猶本講義に續て歐洲經濟史講義を著はすの案子にあり、萬一其運に至れば、一層詳細に卑見を盡くすを得可し。大要は「國民經濟原論」百七九至一八八頁に就て看よ。

其他の參考書としては

Cunningham, An Essay on Western Civilization in its economic aspects. Cambridge 1898.

と云ふ二冊物の小書あり。初學者の精讀に甚だ便なりと雖も、必ずしも大なる學問的創見を包めるものにあらず。唯今日まで此種の書の殆んど存せざれば、

此書に藉るの外一部にて全體を知る可きものなきを奈何せん。一國又は一時代を論じたるものは甚だ多し、其中重なるものは「國民經濟原論」二百十一頁以下に掲げ置きたれども、これとても甚だ不備なることは言ふまでもなし。

昔の強制耕作、斑田法、殊に所謂三圃法及びチュートン人の「マルク」制度は別に詳論を要するものあり。アシユレーの英國經濟史に試みたる説明は甚だ簡潔にして最も要を得たるものなり。

Ashley, An Introduction to English Economic History and Theory. 3. E. 1894.

第一卷上冊第五乃至四十二頁を見て知る可し。同氏は我日本に就ても亦同様の評論を試みたり。論は氏の

Survey's historic and economic. New York. 1900.

百五十二乃至百五十六頁に載たり。此を拙著「日本經濟史論」坂西由藏君譯「第八五乃至百五頁并其以下の處と對照して讀まば多少瞭解を助くることあらん。拙著「經濟學研究」百六十頁以下「經濟單位の發展に関する新研究」併せ見るも可なり。

第三章 英國に於ける産業自由并に 企業の發達

現在世界に於て産業の最も發達せるは英國なること言ふまでもなし。英國は由來其地理上の地位歐洲諸國民の粹を蒐むるに適し、國中交通の障害となる可き高山なく、何れの地方も海に近く、河流また多くして水運の便に富み、加ふるに、ノルマン朝、プランタジネット朝歴代の國王中央統一の政策を採り、之を遂行するに銳意したるが爲め、國內に分權の割據して國運の進行を沮むものあるなし。之を要して云へば、英國は一方に都市の發達より來る活動の氣象を涵養したると共に、他方には統一國家の特長を享有し得たるものにして、獨逸に於けるが如く、都市が政治上の自治權を伸張すること無かりしは、彼に比して、劣るが如くなれども、其が爲めに中央集權の統一的發達を早めたるの大利益ありしを忘る可からず。殊に長子相續の制の嚴重に行はれ、季子は父母の家を去りて、四方に其才を伸べざる可から

ざりしが爲め、階級的懸隔の弊を少からしむるを得、從て、經濟的活働を尊重し、産業を優遇する氣風を養ふを得たるの利あり。政治上の擾亂は稀ならざりしも、一面、毅然として、專制權力の壓抑に對抗すると共に、他面に於ては、正當なる理由あるときは喜んで公けの權威に服従し、革命の舉亦時に起るありとも、苟くも確定の目的存するにあらざれば、容易に動かす自由を愛すると共に、秩序を尙ふの風は、和蘭人を除ては、他に其類を見ざるなり。

英國に於ける商工業の發達は之を大陸諸國殊に獨逸和蘭に比するときは遙かに後れたるものなり。其先づ獨立自治の精神を發揮したるは農民にして、彼の「エフマン、ブーチャー」我邦の郷士の類は、英國に於ける産業自由の先驅と看做す可きものなり。蓋し英國が商工業に於て世界に冠たるに到りしは、誠に近時の事にして、數世紀の間英國は大陸諸國の後塵を拜し居たるものなり。アングロサクソン民族を以て、先天的に特に商工業に長じたるものとなすは、現在あるを知て、過去を知らざる皮相淺薄の見解なり。今日に於ても、倫敦の株式取引所に於て最も投機

的なる取引を營むものは、純粹の英國人にあらずして、外國人殊に猶太人、伊太利人なり。英國が商業上に於て他國を凌駕するに至りしは、經濟上の活働殊に商業が獨立自治の精神を以て營まらるに至りて後の事なり。英國が經濟上世界に冠たるは英國人が特に商業國民なるが故にあらず、今日の世界市場に驅馳して、成効を收むる最大要件は獨立自治の精神に於て、英國が特に傑出するが故のみ。英國に於ける企業の發達は、端を農業に發したるものにして、當時英國は歐洲諸國中模範的農業國として許され、農産品は輸出物の最重要位を占めたり。商工業に於るにあらざれば、獨立獨行の精神を發揮すること能はずと思ふの誤なる英國の例を見て知る可し。殊に物納と夫役の制度を金納小作制度に改めたるは、英國の卒先してなせる所にして、獨立自治の自由なる經濟的活働は、之れが爲めに有力なる刺激を受けたり。

十四世紀に於て歐洲を跋扈したる黒死病は、普く重大なる經濟上の變動を喚起したる中に就て、英國と大陸諸國殊に獨乙とは、全く正反對の影響を被りたるもの

にして、黒死病の爲め人口の激減したる結果、農民の數亦た著しく減少し、農業者殊に地主は之が爲めに苦み、此困難の爲めに、地主と農民との間の關係大に變じたるは已むを得ざる所なれども、其英國に於けると大陸諸國に於けるとは、正反對の結果を見たるは、後來の企業的發展に最大の影響を及ぼせり。即ち英國に於ては之れが爲めに、地主は農民優待の必要を感じ、未だ小作制度の起らざる所に於ては新たに此制度を取り、所謂「農民解放」に於て一大進運を招き、又種穀農業を捨て、牧畜殊に牧羊業に移るもの少からずして、共に地主自ら其所有地の耕作を可ること已み、人格を壓迫し、下民を征誅する封建的關係亦た解除せられ、之に代て契約關係、對等主義の大に興るを見たるなり。從て農業の經營は益々大規模となり、殊に大仕掛の牧羊業起り、之を經營するに資本的組織を以てするに至れり。是に於て、自ら土地を有せず、唯だ年々一定の地代を拂ひ、之に資本を投下し、契約關係を以て勞働者を雇ひ、全體の損益は悉く自ら負擔し、全責任を以て之を指導管理する「ファーマー」の數著しく増加せり。此「ファーマー」は即ち今日の商工業に於ける「企業者」

「カピタン、ラブ、インダストリー」の前身と看做す可きものなり。されば耕作業と牧羊業とを問はず、大仕掛經營の起れるは、他日大資本的工場工業の起る可き準備なること「エママン、アーチャー」が會て手工業の先驅たりしが如きものと云つて可なり。

次に英國に於ける自由産業の發達に深き影響を與へたるものを宗教となす。英國が夙にルーテルの新教を採りたることは、其經濟上の發達に直接并に間接に大關係ありて、獨立自治の氣風の伸張の原因となり、結果となりて、其重要輕々に看過す可からざるなり。蓋し宗教改革は精神上に於て、階級思想を打破し、個人の權威を救へ、人の神に繋するは法王なる仲介者を要せず、如何に卑賤の身を以ても直ちに赤裸々神に肉薄し、交通し得るものなるを宣言したるものにして、其間接の影響は、また經濟上に及びて、個人の責任、人格の自由の觀念を強からしめ、經濟的活動に於ける人の尊嚴と重要とを鼓吹する大なるものあり。(ウエスコットは「基督教の社會的方面」第百二十一頁に論じて曰く「宗教改革は個人性を確保したるものなり。

元より個人性は人生の全部にあらずと雖も、人間の本性并に働作の凡ての方面に於ける人性主要の部分なり。されば吾人は獨り神と共に生き、神と共に死せざる可からずと云ふは全部の真理にはあらずれども、事實たるは否ひ可からざる所なりと。猶ヘーゲル「歴史哲學」第四篇第三章第二章を併せ見る可し。

新く人格の解放に預て功ありし新教は、また其欠點を有せざるにあらず。殊に清教徒に至ては其欠點を最も極端に表はしたるものにして、偏狭自ら獨り高しとし、爲めに往々優美なる精神上の發達を抑ゆることあり、藝術の進歩其爲めに沮喪せられたること尠からず。舊教を奉ずる國に於て人情書の發達し、新教國殊に英國に於ては山水風景畫に長じたる亦た此に因縁する所ありと云ふ可し。

今此くの如く剛健其度を過ぎ、他人を排しても自信を貫かんとするの風は、必ずしも嘉す可からざるも、英國が他日に於ける偉大なる進歩發達の要素たる活力は、また自ら此間に養ひ育てられたるものと見る可きなり。此點に於ては和蘭も亦英國に等しき長所と短所とを兼備するものなれども、個人中心主義の最も發達し

殊に其作用の經濟上に於て著しく、世界の模範たるに至れるは英國なり。之を宗教改革の英國に及ぼしたる直接なる經濟上の作用とす。

次に其間接の作用も輕視す可からず。今日英國に於て主要なる工業たるもの、多くは宗教改革間接の作用によりて、移植せられ、擴張せられたるものと云ふ不可なければなり。其故は新教起て以來、大陸に於て宗教上の迫害屢々起り、其極大陸に於ける新教徒は身を措くに所なく、逃竄の止むなきに至れる時、夙に新教に歸依したる英國は、此等被迫害者を容るゝ寛大之れを待つこと優渥なりしかば、彼等は踵を接して英國に逃れ來り、同時に大陸の優勝なる文明殊に産業の技術を英國に齎らし來りたればなり。恰も昔時支那朝鮮の歸化民が我邦に各種工業の濫觴を成したるに等しく、佛蘭西の「ユージュノット」の徒、フランドル地方の逃竄民等は、英國に新工業を移植し、從來に勝れる諸種の技術を教へたるものにして、スマイルスの如きは此等歸化民が英國に齎らし來れる賜の大なるは人皆知る所なれども、猶世人の普近惟ふ所に勝る遙かに大なるを論じたることあり。是れ皆英國が政治上、宗教

上寛容なる態度を取りたる報酬にして、宗教改革の大なる影響が、偶々早く新教を奉じたる英國に與へたる間接の結果なりと云ふ可し。

英國の經濟生活は斯くの如き幾多の便益に養はれて發達し、殊に各人に其才能を遺憾なく發揮せしむるに最好の基礎を與へ、其結果は即ち産業組織の擴張と、企業の發達とに於て顯はるゝに至れり。固より分業の制度は何れの國に於ても經濟上の發達に伴ひ起る可き所にして、決して英國に特有の現象にあらざるや論なしと雖も、近世の分業には必ず欲く可からざる一の特色あり、英國は先づ最も早く此特長を備へたるものにして、其分業の發達は他國の企て及ばざるものあり。

其特色とは、即ち技術と經濟との分岐を云ふなり。詳しく云へば、事業經營并に危険負擔の事を以て専務とする一階級發生して、生産上實行の技術の任に當るものと相分立し、獨立したること之れなり。是れによりて技術者は専ら其業のみに従事し、全體の經營殊に損益の打算に關して復た意を用ゆるに及ばず、只管に技術上の能力を發達し、優秀なる製品を作るに他意なきを得、又各技術者は經濟上の指

導に於て統一の方針を司るものを載くにより、安じて之れに信頼し、其命を仰ぎて協業の實を果ぐるを得たり。是れ今日の分業制度の欲く可からざる前提にして、此前提の要件を先づ完備したる英國が分業の發達に於て他國に冠たりし所以決して偶然にあらざるなり。而して此の意味に於ける分業制度は、或は向後の發展により其形態を變ずることある可く、殊に經濟上に於ける共同主義の擴張するに至り、今日稍、此種分業の變形起るを見ると雖も、兎に角今日までの經濟上の發達は、此分業制度の爲めに促がされたるものにして、其重要は現在に於ても猶毫も損する所なきものと云はざる可からず。

今此分業制度に基く經濟組織の中に在りて、凡らありとありゆる事業の中樞となり、主腦となり、之に活動を與へ、之を指導管理し、凡ての經濟行爲の活動の源となり、其全責任を擔ひ、其損益を悉く己れに取る經濟階級を綜稱して「企業者」と云ふ。實に今日の經濟組織は此企業者ありて始めて存すと云ふも太過なきなり。而して英國を此企業階級の誕生地と呼ぶ必ずしも不可ならず。其先づ發生したる

は農業にありしこと前に述べたり。此意味に於て英國に於ける自由産業の教育所は田圃の間に在り云ふ不可なし。されば農業と他の産業殊に商工業とを以て其本來の性質根本的に異なり其の發達を支配する條件は儼然相容れざるものなりとするの誤なるを悟る可し。今日の經濟生活にありては最も進歩したる状態に於ける農工商の三業は殆んど相分つ所なく均しく企業の目的を達する一の手段と看做さるゝものにして多くは形態の上に於ける異同たるに止りて之を支配する精神は企業的なると然らざるとを分つ可きのみにして苟くも企業の目的に合ふ以上は其農たり工たり商たるが如きは單に手段の時に相交錯するものとせらるゝなり。然れども自由産業と企業との最も曠足を伸したるは農業にあらざりて工業にあるや言ふを待たず。而して英國の工業に於て此企業制度の起り着々其組織の發展を呼び起したるは復た其商業勃興以前即ち十五世紀に於ける羊毛工業に於て先づ見る所なり。(オーヘンコウスキ)英國の經濟上の發達「百十二頁以下に詳述あり就て看る可し。商業の盛なるに至らざれば企業の發達望む

可からずとするの誤なることまた以て知る可し。然れども英國に於て商業の勃興し新市場大に開かれ従て工業の地方的集中を喚起したるによりて分業制度亦長足の進歩を爲せる事は忘る可からず。蓋し中世に於ては地方的に集中せらるゝ工業は、嵩少く價高きものを生産するものに限り價廉く嵩大なるものは一地方に集中することなく國內到る處に生産せらるゝを常としたり。然るに新大陸に於ける新殖民地大に發達し爲めに歐洲の工業品を需要すること著しく増加するに及びては價安く嵩大なる工業品は頓に需要の激増を見従て此種の工業品の生産も亦た勢ひ地方的集中の必要に迫られたり。然るに一品多量の生産に當りては之に従事する生産者即ち労働者を一定の組織の下に統一し全員を共同の目的に向て圓滿に調和指導すること最も肝要なり。價高く量少きものゝ生産にありては之に従事する労働者の數少きを以て組織統一の事は必ずしも第一の要件に屬せず。然るに價安く量大なるものを多數に生産するには之れに使役する労働者の數多く従て克く之を組織し之を統一し一定の秩序を立て其間相杆格するこ

どなきを圖らざれば、事業の成功は期す可からざるなり。是れ英國に於て此種工業の地方的集中の必要を促がしたる所以にして、而して又是れが爲めに資本的企業制度の發達を促進し、交々相援けて、英國工業全盛の因をなせり。

企業制の發生と工場制工業殊に機械的生産の發生とは同時期に屬せるものにあらず。機械生産の起る前、工場制度の始まれる前、企業制度は既に存在したるものと前既に述べたるが如くなり。而して當時適々「工場」存するあるも、多くは小規模のものに過ぎずして、實際生産の事は専ら從來の手工業者が其住居若くは細工場に於て營みたるものにして、獨逸の學者が此状態を「家内工業」と名くるは最も當を得たり。企業者は或は材料を給することあり、或は器具を貸與することありと雖も、直接生産の事は之れを家内工業者なる技術上の生産者に一任して、其爲すに委ねたり。されば技術上に於ては未だ何等の統一なきものにして、其統一し組織する所は經濟上にあり。各技術者は一定の契約に依り、其専門の技術を施すに止り、之を一箇の完成品として市場に出すは企業者なり。故に此初期の企業制度を

マーシヤル氏は「システム、ラプ、コントラクト」部分請負制度と名け、獨逸の學者殊にフエヘル氏は「フェルラーク、システム」前貸制度と云ひ、此種企業者を「フェルレーガー」(前貸主)と稱す。名異なるも、雖も言ふ意は同じ。部分請負の契約を結んで、其事を營ましむるには、多くは工錢の一部分を前貸するを常とするを以てなり。而して英國に於て此制度の最も發達したるは織維工業にして、大陸に於ても亦多く然り。我邦の上毛地方に於ける織物業は今日また之に酷似せる制度によりて營るものにして、所謂「織元」と名くる者は取も直さず獨逸の「フェルレーガー」に該當し「賃織」と名くる者は即ち實際の生産従事者なり。

此部分請負制度又は前貸制度に基く家内工業に次で起れるものを工場制度とす。然れども工場と云ふも直ちに機械的生産を營むものと速断す可からず。蓋し工場制度の發生は機械的生産の起る以前にありて、或意味にては工場制度ありて始めて普く機械を工業生産に採用するを得たるものと云ふ可きなり。何となれば、機械的生産は發達せる分業の存在を前提として要するものにして、一定の場

所に多數の勞働者を集合する工場制度の起るなくしては分業の發達は望む可からざればなり。されば工場制度の起れるは分業をより綿密に、より十分に行ふを得んが爲めと見る可きものにして、獨逸の學者はブエヘル氏の説を取りて、一般に此初期の工場制度を名けて「マニユファクトウア」と云ふ。直譯すれば「手先製作」の意なり。其特色は從來の家内工業の各製作者各分立するに反し、之を一定の箇所、集合し、統一的の指揮監督の下に、各其分業に従事せしむるにありて、其一定の箇所を「工場」と云ひ、從來「フェムレール」たりし企業者の有に屬するを常とす。英語にて「マニユファクトリー」と云ふは此の「マニユファクトウア」を營む所なればなり。アダム・スミスの一言によりて有名となれるピン製造の例は、此狀態に於ける「マニユファクトリー」にして、未だ機械を使用せざるものなり。此「マニユファクトウア」の制は、從來の家内工業に於ける經濟上の統一組織に加ふるに、技術上の統一組織を以てしたるものにして、一の過渡的の制度と見るを得可きものなり。我邦の製糸業は從來多く此種の過渡的工場制度に依るものにして、今日と雖も大體に於て

然りと云ふ可きものなり。而して現在に於ける工場勞働に關する弊害の甚しきものは、却て此種工場に多く、機械的生產を營む工場は、之に比しては勝るもの多し。殊に我邦に於て然るもの如し。蓋し發達の初期に於ける狀態に停留する産業は一般の進歩に伴ふこと難く、爲めに社會上經濟上劣等なる生存を維々の外なきが爲めなり。

然るに工場制の發生によりて促されたる分業の急速なる進運は、機械の發明を喚起するに預て大にかかり、機械的生產は着々各種の工業に起り、其結果延てまた企業制度の上に及び、大經營の工場亦所在に續々として起り、「フェムレール」より一進して其獨立の地位を堅ためつゝありたる企業階級は、茲に全く自由なる獨立的存在を確保するに至れり。千七百六十年以後二十五年間工業上の改良と發明とは踵を接して英國に起れり。即ちブリンドレーの運河、ワットの蒸汽機關、ユルト、リューパーツク、ハーグリーブス、クロムプトン、アークライト、カートライトの各種の改良發明あり。千七百八十五年蒸汽動力を有する木綿工場始めて設けられ、十

九世紀に入りては、蒸汽船、蒸汽印刷機、瓦斯點燈等行はれ、續て、蒸汽車、電信機、寫真機等現はれ、爾後製鋼業、電燈、瓦斯發動機等亦起り、英國工業の面目全く一變したり。今此大變動の特色は、更らに他にあり、即ち大規模の生産を興し、其結果大企業者の輩出したる事是れなり。蓋し如何に偉大なる改良發明も、單に技術の上にとりて、大企業者の起りて、實際上に之を利用するなくんば、英國工業の今日ある到底期す可からず。而して近來電氣發動機其他の發明ありて、動力を所在に細分して送るを得るに至れると、所謂「小發動機」の普及によりて、小規模の機械的生産をも有利に行ふを得るとにより、或は大經營の進歩を妨ぐるものあるが如しと雖も、大體に於ては家内工業の益々大工場に吸収せらるゝことは否定す可からざる事實なり。〔此點に關しては、ヘルト「英國社會史」第二卷第三章并に千八百八十年米國國勢調査書第二冊に掲げたるカローン・デーライト氏所論を参照す可し。〕

斯くの如き進歩の勢は習慣の情力を抑へ、殊に從來己れの生れたる處を去るを難んじたる風を打破し、住居轉換の自由大に發達し、勞働に對する自由市場擴張し

各人は利益の見込ある所を追ふて容易に移動するに至り、其結果は勞働の價值を定むる條件を更新し、賃銀制定の上、新生面を開くに至れり。蓋し十八世紀の頃までは工業勞働は概ね小賣的に雇傭せられたるものにして、一時大多數の勞働者の需要せらるゝことなかりき。尤も大陸諸國に於ても、英國に於ても、此以前既に一時に多數の勞働者を雇傭したる例全く之れなきにはあらずと雖も、斯くの如きは事ろ除外例に屬したるに、十八世紀以降に至りては、例外は變じて、常例となり、殊に英國に於ては勞働の雇傭は小賣的に行はるゝこと止み、一時に多數者を卸賣的に雇入るゝこと普及したり。従て勞働の價なる賃銀も、また習慣に依て束縛せられずして、個々の場合に就て懸引行はれ競争の理に基て制定せらるゝに至り、十九世紀に入りては、賃銀は全都會、全國又は進んで全世界に渉る需要供給の關係によりて定めらるゝこと益々普きを見るなり。

此く産業組織は近時に至り其面目を一變したるの結果、生産力の増進も亦著しきものあり。新産業組織は適材を適處に置き、敏腕堪能なる者を拔擢して其技能

を擅まにするを得せしめ、最も進歩せる機械、最良の器具を盛んに使用するを得せしめたり。然れども此新趨勢はまた大なる弊害を伴ふを免れず、而して幾多の弊害中何れが眞に不得止ものにして、何れが避け得可かりしものなりやを判別するは難事なり。故は、變遷の趨勢甚だ急速にして、殊に英國は當時前例なき幾多の事變の續發を経験したればなり。此等事變は英國に多大の困難を醸し、普通人の見て無制限なる自由競争の弊害なりとするもの、實は多く其原因を此に有するものならずんばならず。即ち當時英國は其最大の殖民地を失ひ、間もなく佛國との戰爭起り、兩者相助けて英國經濟界に大打撃を加へ、更らに之れに加ふるに連年の凶作ありて、食料品の價昂騰し、又貧民救助法の施設甚だ當を失するものありて、國民の獨立心を傷くること尠少ならず、此等の諸原因綜合して英國の經濟上の活動力は甚しく減殺せられたり。されば十九世紀の劈頭に於ける英國自由企業の發展は幾多の大なる困難の下に奮闘したるものにして、自由企業の伸張に免る可からざる弊害も、亦爲めに助長せられ、必ずしも之に關連せざる餘弊簇出したるものに

して、其美點之が爲めに掩蔽せられたるもの尠からざるなり。

此困難の時勢に處して、從來の産業上の習慣殊に「ギルド」の制度は經濟上の弱者を擁護する力なきこと明となれり。然るに當時「ギルド」的舊習を廢棄したるものありしは無論なれども、亦た人爲の劃策を以て之れが維持に勉めたるもの尠からず。而して此反動的傾向の勝を占めたる處に於ては、新工業は却て其地を去りて、他の斯くの如き檢束を存せざる自由なる地方に移るを常としたるが爲め、舊習の維持に成効するは、其經濟上の進運に於て大頓挫を來たす所以となれり。又勞働者間に物價并に賃銀を治安裁判所に於て公定する舊慣を回復せんとする運動あり、其他復古的反動的傾向の盛なりし所ありしと雖も、經濟上進歩の大勢は到底隻手を以て支ふ可きにあらず。相當の理由ありて發生したる慣習制度は時勢變遷し、其存在の理由消滅するに至りて後之を再び起さんとする時は、爲めに受くる害毒の甚しきものあること古今東西同一轍なり。

舊習は再び返す可からずして、而して新なる社會的設備の未だ之に代る可きも

の起らず。當時の時勢は此新なる救済法を要求する甚だ急なり。然るに此要求は永く充されずして一大缺陷を存するに至れり。蓋し當時經濟上進歩の速度甚だ急激にして、此要求を顧みるの遑なかりしものなり。此新時代の嚮導者たる企業者は皆力行奮闘によりて富を作らしたる人にして、一意猛進敢行退くを知らず、富を墨守するの徒の終に破滅に陥るを見て、悉く之を粉碎するに銳意して、之れに代はる可きものを起さんとする念のなかりしは亦不得止どころなり。彼等の待む所は自己の手腕にあり、自らの運命は自ら之を開拓するもののみ有り、歸す可しとし、優者必勝の競争場裡に於て因循するものい失敗を招くを以て、毫も同情に値せずとし、經濟上の弱者を擁護し保育せんとの心を有すことなし。されば彼等は徹頭徹尾自由競争に基く個人主義に驅馳し、労働者に對する亦た自由競争主義あるのみならず、昔日の習慣に束縛せられ、優者專制の働きを妨ぐるものを以て、全然他人の事となし、之れを打破して一に全く其趨くに放任す可きものなりと確信したり。

然るに恰も以上列舉したる諸種の災害連りに英國を襲ふあり。爲めに英國の富は著しく減少し、千八百二十年に於ては、英國民全體の所得の十分の一は國債利子の支拂の爲めに消費せらるゝに拘らず、各種の新發明の爲めに價の低落したるは労働者の用に適せざる商品に多く、而して又當時英國議會は地主の全然左右する所にして、穀物の自由輸入を妨ぐる政策を固持して、漁へざりしかば、労働者は安き食料を得ること能はずして、其困難は實に堪へたるものあり。然るに企業階級の労働者を待つ全然對等の競争者を以てし、賃銀は一に自由競争によりて定めらる可きものとすも、事實に於て、此の所謂對等は却て甚しき不對等にして、其競争は企業者に取りてのみ自由にして、労働者は日々の生計を維持するが爲め、必ず何程かの賃銀を得ざる可からざるものなれば、實際は毫も自由なる競争を爲すにあらざるれば、自由對等の美名の下に却て甚しき不自由不對等増長するに至れり。労働の供給は商品の供給と異り、一日稼がざれば、一日飢へざる可からざるを常とする労働者は、賃銀の多寡を論ずる餘裕なく、一に全く企業者の規定する賃

銀を以て甘ずるの外なく、當時未だ労働者團結の制普からざりしが故に團體として企業者と對峙して、此缺點を救済するの道なく、唯々優勝の勢力を以て之に泣む企業者の命維れ従ふの外なく、長き労働時間、不健康なる労働状態の下に呻吟して之を奈何ともする證なく、其惨狀實に憐む可きものあり、然れども人性終に欺く可からず、又狂ぐ可からず。此の労働者虐待の結果は生産力の上に顯はれて、労働功程著しく減損し、殊に幼年者を工場に使用するの風盛んに起り、酸鼻に堪へざる状態續出せり。尤も十七世紀の頃既にノルウヰッチ地方等にて幼者を使用したることあれども、十九世紀に入りては此風習各所に普及し、大工場起りて愈々盛んとなり、其弊害は極度に達したるなり。

而して英國の歴史中、如何なるものを以てするも之に優る興味と教訓とを與ふるものなき、彼の「トロード・ユニオン」の制度も、亦此時期に於て幾多の反對と奮闘しつゝ、其光榮ある發達を始め、労働者は政權の保護を求むるの念を絶ち、自裁自治獨立濶歩し、自己の團結力によりて自らの進路を開拓せんとの精神を振ひ興し、政府

に要する所は唯放任の一事あるのみとなせり。彼等は政府の産業生活に干渉するは害あるのみにして、寸益なきを幾多の苦き經驗によりて知悉し、唯労働者の結合を妨害する法律制度の撤廢を要求し、企業者に與ふると全く等しき自由を與へられんことをのみ望めり。

然り、然りと雖も、企業者專制の弊を極めたる經濟的自由の急激なる擴張より生ずる弊害の真相を究め、眞面目に之れが救済法を研究するに至れるは極めて近時の事に屬す。今日吾人は資本的企業者が只管自己の目的を逐ふに急にして、多數労働者の幸福、其の人格的要求を犠牲に供して、顧みざるの非にして、富者は個人として、又國民の一員として、權利を有すると共に、義務を有するものなるを認めざる可からざるを看破するに至り、新時代の經濟問題の真相愈々發輝せらるゝを得るなり。

之れ元より吾人の智見の先人に比して大に加はり、實際の問題を知ること愈々精密となれるが爲めなるや疑ふ可からずと雖も、其間亦時勢の進運の止む可からざるものあるを記せざる可からず。十九世紀の初期に於ける英國に取りて最重要の

問題は如何に國富を充實す可きや如何にして其商工業をして他國との競争に優勝なる地位を占めしむるを得可きやに存し、時人は一に全心を此に傾注して、復た他を顧慮する違なかりしなり。然るに今日に至りては國富を充實するの道は其淵源を補養するにありて、富を増加せんには先づ富を作り出す可き生産力の充實を圖らざる可からざるの理漸く識者の認識する所となり、従て勞働者生産力の充實は最重要の問題たらざる可からざるを悟るに至れるものなればなり。而して之れが爲めには或は産業の自由に束縛を加ふる必要生ずることあらん然れども此束縛は舊時の慣習的壓抑的にして自由を無視する檢束とは天地霄壤の差ありて、勞働者保護の政策は決して勞働者なる一階級を偏愛するが爲めに非ず、主として經濟上自治の力なきものを助けて自治を爲す可き能力を備へしめんとするにあり。即ち自ら助くるを得可き様に助くるを趣意とし、殊に對等競争場裏に於てハンデバックアップ付けられある幼者と婦女などを保護して、不當なる壓迫を免れしめんとするにあり。決して自由の尊威を傷くものにからず、又主義として自由競争

を捨つるものにからず。名實相合ふ自由と對等關係とを昔からしめんと欲するものなり。換言すれば昔日專制的威力の濫用を抑制する力たりし習慣に代へて新時代の壓制を抑退す可き新防備を興へんとするなり。されば之れが爲めに自由を制限することは勿論あり然れども其之を爲す決して他より之を強ゆるにからずして、當事者の自由選擇に依る可きものとするなり。近時起れる共同主義共同所有共同消費の制度は此意味に於ては自由主義個人發展主義の反對と見る可きものにあらず、却て自由人格の發展したるの極生じ來れるものにして、最も進歩したる自由主義個人主義と見る可きものなるなり。

然れども健全なる社會上の進歩は決して急激を期す可からず。眞に成績を揚げんと欲するものは必ず漸進するを要す。絶へず高潔なる社會上の實際的理想を標榜し、倦まず弛まず着々之れに向て向上進歩するときは漸次個人の不當なる跋扈の弊害を杜絶し、共同的利益の益々尊重せらるゝこと、個人主義未だ起らざる以前に勝る日來らんことは、現時の趨勢に徴して疑を容れざる所なり。

此發達は周到綿密なる考慮に基く非利己主義の生じ出す可き所にして、之を彼の終始習慣に束縛せられ、其惰力によりて僅かに社會の秩序安寧を維持し得たる昔日に比すれば、其程度の高き到底同日の談にあらざるなり。

以上は専ら英國に就て觀察したる所なれども、大體の傾向に至ては他の文明諸國も亦之に洩るゝものにあらず。殊に米國は經濟上に於て英國の墨を摩せんとし、濠太利亞亦之に劣らざるものあり。加奈陀亦然りと云ふ可し。斯くて相共に刺激して此新機運の進歩に寄與する所尠からず。

歐洲大陸に於ては自由團結の勢力未だ是等英語國民間に於けるが如くならず、殊に政府の經濟生活に對する態度は區々なり。此點に於て獨逸は歐洲諸國に冠たるものと云ふ可く、獨逸が英國より後れて近世的産業場裏に入り來れるは、多くの點に於て前者の過を見て自ら戒むるを得るの大利益を有し、英國の嘗て經たる苦き經驗を再びすることを免るゝを得たり。而して獨逸に於ては政府の産業生活に關與すること甚だ多く、獨逸の官僚の如く智あり能ある人材を網羅せる政府

他に多からず。之れに反して其民間の活動力は英國に比して甚だ遜色あるを免れず。故に政府の經濟政策に於ては、英國は獨逸より學ぶ可きこと尠からずと云ふ可し。然れども獨逸に於て成效せしもの、必ず事情を異にする他國に於ても成效す可しと信ずるは謬なり。政府内に人材を網羅すること獨逸に及ばざる他國が妄りに獨逸を模倣するときは失敗に終る可きや必せり。

以上二章に於て經濟的自由は長き發展の行路を辿り來れるものにして、其の完成の域に達したるは極めて近時の事に屬する所以と、并に之に關連して經濟學者が最も意を用ひて研究す可き最重要問題の實質も、亦最近時の發生に係ること、を明かにし得たりと信ず。次に此問題の形態が以上の實際生活上の發達と其時々の學者の思想との影響の下に、如何に變遷し、發展し來りて、終に現今に至て如何なる状態に到達したるかを略記せんとす。

《補論》

英國の經濟史に關しては文献甚だ少からずと雖も、未だ全體に涉りて綜合したる著述あることなし。アシユレー氏の『英國經濟史』前に出づは最良著として一般に認めらるゝ所なれども、既刊二冊は上古より中世紀の終までに止り、其後何故か同氏は續筆を爲さざるが故に、本章説く所の時代に就ては、参照の證なきを憾まざるを得ず。同じ著者の『歴史的經濟的研究』の一書は間々關連ある問題を論ずる節あれども、元と雜誌論文殊に他の學者の著述の批評を蒐集したる書なれば、其論ずる所極めて局部的にして、初學の士を益す可き望少し。カンニンガム氏の『英國商工業發達史』は、名は商工業に限れりと雖も、其實は經濟史の全體に涉る著述にして、二卷三冊を以て、既に全部完結しあり。先以て英國經濟史の全體に涉る唯一の書と云はざる可からずと雖も、其所論學者間に異論ある點甚だ多く、人によりては甚しき駁評を敢てするもあり（Economic Journal に掲げたる

評言を見て知る可し。直ちに初學者に薦むるを得ず。ラーヘンユウスキー氏の『英國の經濟上の發達』は間々奇警の觀察あり、獨創の立論も尠からずして、専門學者の坐右に缺く可からざるものなりと雖も、唯此一書のみを辿らんば、却て徒勞を購ふに過ぎざる可く、佛國マルセキユ大學のブリー教授が佛文にて物せる『英國産業及經濟史』は、附記して、『太初より現今に至る』とある如く、一卷七百四十三頁を以て全體を概論しあるものとて、頗る簡便なりと雖も、最近斯學の研究の立場より見れば甚しく不備のものにして、所説また多くは平々凡々、獨創の箇所を見る可き多からず。殊に本章論ずる企業の發達なる眼目に觸るゝ所甚だ尠し。ローシアース、ブライヌス氏等の小著は、形より云へば、初學者に便なるが如けれども、概論に過ぎて緊要の點を上滑りするは惜む可し。ギツピンス氏の著の如きは讀むも大益なく、讀まざるも大損なしと云ふ可きか。其れに付けてもアシユレー教授が近來實際問題に熱中し、又教育事務に執筆して、其一代の大著述たる『英國經濟史』の續稿に永く筆を絶ち居るは、吳々も學問上の損失と云はざるを得

ず。今日の處、中世まで同氏に依り、其以降は近來新版して大に面目を改めたる、カンニングガム氏の著に依るの外なからんなり。猶兩著とも引用書目を掲ぐる事甚だ親切周到なれば、更らに深く研究する案と爲すに甚だ助あり。

念の爲り以上略評したる諸書の名を左に記し置く。

Ashley, Introduction to English Economic History and Theory.

Ashley, Surveys historic and economic.

Cunningham, Growth of English Industry and Commerce.

Odenkowiak, England's wirtschaftliche Entwicklung im Ausgang des Mittelalters. 1879.

Riv, Histoire industrielle et économique de l'Angleterre. Paris. 1900.

Rogers, Industrial and Commercial History of England. (Lectures delivered to the university of Oxford). Edited by his son. London. 1898.

Price, Short History of English Commerce and Industry. London. 1900.

Gibbins, Industrial History of England.

(此書には二通りの日本譯あり。一は民友社にて出版せるもの、一は農商務省の某氏の試みたるもの、又た此書を種として作りたる邦書もありしやに記憶せり)

猶一種の見解を持って英國産業革命に就て論じたるものに

Toybee, Lectures on the Industrial Revolution of the 18th Century in England.

あり。尊重す可き著作なれども此章と関連して讀むに左迄の益ありと思へず。

又此書を初學者に薦むるは如何ある可きか。猶ほマレヂス氏に近頃左の新著あり

Meredith, Outlines of the Economic History of England, London 1908

主としてアシュレー、カンニングガム兩氏の書の要領を摘記したるもの、獨創の箇所殆んど之れなし。

さて本章に論じたる企業の發達史は、趣味甚だ深くして、簡單の叙述にては或は其意を得難き虞なきにあらず。最近の企業史に關する研究を併せ考へてこ

ろ要を得可きなれ。マーシアル氏は必ずしも企業發達史の大要を盡さんとして此章を設けたるにあらずして、唯だ經濟的自由の極めて新しき産物なる所以を明かにせんと欲せしに過ぎず。元來近頃獨逸に行はるゝ叙述法に従へば、企業の發展史は國民經濟の單位を論ずる所に於てするか(シユモラー氏は國民經濟器官論の部に於て論せり)、又は生産論中企業を論ずる所に於て説くを常とす(プレンタノ氏は「今日の經濟組織」の題下に説けり)。體裁の上より云へば、元より然る可からざるものにして、予も亦其法を執る可しと信するものなれども、マーシアル氏が總論の中に此章を設けたるもの亦た甚だ我意を得たるものあり。故は氏は本論に入りては、歴史的叙述法を用ゆること少なく、専ら現在の經濟組織に就てのみ論究するものなるが故、全體論たる總論の中に於て此くの如き現在の經濟組織は決して昔より其儘存在せしものにあらずして、永き歴史的發展の結果漸くして到達せる一階段なることを讀者の腦裡に確がめ置かんとて、經濟的自由の代表者又負擔者としての企業の發達を概論したるものなり。此意味

に解する時は本章は必ず劈頭に置く可きもの、又た其叙述の極めて総合的なるに首肯せざるを得ざるなり。然るにマ氏が最新版に於て此章と前章とを本文より附録に移したるは遺憾なきを得ず、畢竟マ氏が晩年著しく跡戻りの傾向を表はすものにして予は服する能はざるものなり。

猶マーションアル氏が本章中に引用したる諸著の原名を記し置く可し。

Rogers, Six centuries of work and wages. 1884.

此引用の所予は省略せり。事は封建時代に於て土地は長子のみ唯獨り之を相続し、其他の子は動産の配分を受くることを論じたることに關し、ロージアースが長子は動産の不足を補はん爲め勉めて其相続せる土地の一部を季子に譲り、其れに代へて動産を得んとしたることを云ひたる條にして、右書五十一、二頁に掲げたる論を引きたるなり。又た夫役變じて金納となる事に關し、右書第一章を引きあり。

Wescott, Social aspects of christianity.

Hegel, Philosophy of History.

Held, Zwei Bücher zur sozialen Geschichte Englands.

Carrol D. Wright, U.S. Census for 1880.

Gross, Guild Merchant. Vol. I. pp. 43, 52.

此はギルドの束縛甚しき都府より工業の逃れ去れることを論せる條の引照なり。

Knaus, Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. 1883. II. 5.

此も本文省略せり。引照は商業交通の發達は各國に於ける經濟的發展の歩調を同一にせしめ、從て本章末尾に論じたる經濟上に於ける各國間の差違を漸次減少せしむる傾あることを論じたる一節なり。

アダム・スミスは其「諸國民の富」第三卷に於て歐洲諸國に於ける富の進歩を論ずる事甚だ叮嚀なり。スミスを以て抽象演繹にのみ偏すと爲すの誤にして、其態度は却て近來の所謂歴史派に酷似するものあること、此章を見て知る可きなり。其

最後の章(即ち第四章)は題して「都府の商業は如何に其國の改進に寄與せしや」と云ふ。此れを本章の叙述と併せ讀む時は、スミスは既に勞働の間に所謂企業發達史を説きたるものなるを認めざるを得ず。而して其終末の結論に曰く、
「フランドルに於ける戰役并に之れに續きたる西班牙の執政は、アンヴェルス、ガ
ン、及びブルージュの盛大なる商業を一掃し去れり。然れどもフランドルは
今日にても猶ほ歐洲中最も富み、最も能く耕され、人口最も稠密なる地なり。
戰爭并に政府の尋常なる革命にても、商業のみに基く富の源を枯涸せしむる
こと容易なり。之れに反して農業の堅實なる進歩より來る富は遙かに永續
的にして、羅馬帝國滅亡前後の如く、一世紀、二世紀に渉る外蠻民の掠奪より起
る甚しき變動を被ひる場合の外は、輒く倒壊せらるることなし。」(キアナン版
三百九十四頁)

と。スミスを以て商工業を偏重するものなりと説く學者の妄斷は、此一節を以
て明かに其非なるを知る可きなり。マーシアル氏が、企業成立の端を「エフマン・

アーチャー」に發せりと説くと兩々相照して玩味す可き所にあらずや。近來獨
逸の學者ゾムバルト氏は、其大著「近世資本制度論」に於て近世企業の發達を論じ
て、其物的要件たる大資産は、商工業に於て成れるものにあらず、農業に依て形成
せられたるものなりと主張して、大資産は凡て「蓄積せられたる地代」を本とする
ものなるを歴史的に證明せんと勉めたり(Der moderne Kapitalismus. Bd. I. 1902.
S. 218以下)。其意に曰く、

「中世の富家は多く商人なりしことは否むに由なし、然れども此等の富商は其
商人たる前既に富有を致したるものにして、其富は彼等が地主として取り入
れたる地代より成れるものなり」

と。此論一度出て、甲論乙駁學者間の爭論甚だ喧しく、最近氏の門弟Jacob Stried-
er氏師説を確かめんとて、特に中世に於て獨逸の富市として名高きアウグスプ
ルグに就て、十四世紀より十六世紀に至る間の古文書の研究に従事したるに、其
結果は却て師説の誤なるを證するの外なきに至れりとて、Zur Genesis des modernen

Kapitalismus (1904, Leipzig) なる一書を著したり。是れに依りて異論少からざりし
ゾムバルト説は全く打破せられたるものと看做さるゝものゝ如し。然れども
ゾムバルト氏の真意は、必ずしも商工業の富を無視したるものにあらず。商工
業のみ巨富の淵源なりとするは謬にして、農業但し地主のみを指すと勿論なり
も亦近世的企業發達の初期に於ては、大資本形成に寄與する所多かりしを云は
んとするに過ぎず。此意味に於てゾムバルト説は確かに真理の一面を捉へ得
たるものとせざる可からず。然るに此論決してゾムバルトに創まれるにあら
ず。アダム・スミスは既に己に之れを道破したるものなり。キヤナン版第三百八
十二頁以下を見て知る可し。ゾムバルトは或は此箇所を讀んで其新説を案出
したるにあらずやとさへ思はるゝなり。唯學者スミスが既に此論あるを忘れ、
ゾムバルト氏を以て如何にも破天荒の新説を唱出するものゝ如く考へ異論紛
々たるなり。事本章と直接の關係なきが如くにして、其實大に参照を要す。詳
くは夫れ〱の原著に就きて之れを知る可し。最新出版の「ニコルソン氏」の
國の計劃」にも此本論あり。

第四章 經濟學の發達

現在經濟組織の特色たる經濟的自由の淵源甚だ遠くして、而も其完成は最新の
現象に屬すると同じく、經濟學理の發達も亦た由來甚だ久遠にして、而も一科の獨
立したる學問として成り立ちたるは最近時の事なり。今日の歐洲の經濟組織は
其源を遠くアリア并にセミト民族の文明に發し、希臘の哲學、羅馬の法律、猶太の宗教
の影響を受けて發達し來りたるものなれども、今日の經濟學理は何れも其直接の
産物と見るを得可きものはなく、種々の變遷消長の間、徐々に展開し來れるもの
なり。蓋し奴隸制度を以て基礎とせる産業組織の下、概して商業を甚しく蔑視し
たる時代には、經濟學的思索の容易に起らざるや多言を須ひず。今俄かに之れを
見れば、今日の經濟學の説く所の根本思想は、希臘羅馬の哲學者の富に關する思想
と全然反對の地位に立ちて、相容るゝ能はざるものと云ふ可きに似たり。而して
當時多少なりとも經濟生活に關係したる議論は、宗として國家の財政若くは公共

の經濟に就て立てたるものにして、其個人的方面は全く顧みられざりしやの觀あり。是れ元より已むを得ざるに出づるものにして、アリストテレス、プラトンの經濟論は議論の順序として其一端に觸れたるに過ぎざるものにして、直接經濟生活其のものを研究の主題としたる譯にあらす。其所論の時に頗る青紫に中るものあり、精到該博或は近世の學說を以てして、猶ほ企て及ばざるものあるに拘らず、其影響の他の學科に於けるに比して多く讓らざる可からざる所以のもの、抑も偶然の現象と云ふ可からず。歐洲中世に入りては教會法學者の經濟論頗る勢力あり、學說として之れを見るに、復た輕視す可からざるものありと雖も、之れを系統あり、秩序ある一個の經濟學說として見んは未だし。即ち希臘羅馬の哲學的法理的經濟論と、中世の教父的經濟論とは、之れを目して、經濟學の淵源と爲すは、不可ない、直ちに獨立せる經濟學說と爲すは、甚だ可ならず。是れ當時の經濟生活實際の要求が未だ一個完結せる經濟學を呼起すに至らず、唯其時々の必要に應じ、個々の經濟現象に關する時務論を以て満足したる爲めに外ならずして、一科の學として

の經濟學史の研究より云へば、頗る細心の注意を値するものなりと雖も、經濟學發達の大勢を、僅々數言を以て要約せんには、之れを省略せざるを得ざる所以なり。然らば今日の經濟學の直接の淵源と見る可きは、何れにして、其時代は何時の頃なりしやと云ふに、中世紀の終、近世の初、各種の新發明、新發見の起りて、歐洲の經濟生活が頗る活働を加へたる時はなりと答ふ可し。此時代を總稱して個人覺醒の時代と呼ぶも不當と云ふ可からずして、又た或は第三階級、營利階級勃興の時代とも見る可し。而して此大活働に誘はれて起り來れる經濟學說は、其昔希臘に於けると同じく、先づ國家の問題に、主力を傾注したるは、偶然と云ふ可からず。蓋し此新機運は、所謂「ルネサンス」に於て先づ顯はれて、中世の分權制を破りて、中央集權統一の新趨勢を促進し、凡ての活働、あらゆる進歩は、皆此一事を主眼として起りたれば、其當然の道行として、經濟上に於ても、先づ如何に此の統一集權に經濟的基礎たる可き富を附加し得んかの一事を以て最重の問題としたればなり。即ち當時の學者は、如何にして國を富ます可きかの研究に全力を注ぎたり。而して當時實際

の必要上國を富ますんとするに第一の要件は國に貨幣を集積するにあり。されば如何に國を富ます可きかの問題は實際の上にては如何に國內に貨幣の集積を増す可きかの問題と同一事と看做されたり。之れをメルカントリズムの真相と爲す。從來學者「メルカントリズム」の眞意を誤解すること甚しく之れを以て「富と貨幣」とを混同せる一種の謬想に基づくものとして非難するを一般とせり。然れども今を以て昔を律するの非なるは論を待たざる所にして「メルカントリズム」時代の歐洲と今日の歐洲とは根底に於て事情を異にするものにして今日と雖も國富充實の第一要件として貨幣の集積保持を急務とする事情の起る時は實際上に於て「メルカントリズム」に多く異ならざる施設を見るものなり。即ち日清日露戦争に際する我邦の如きは甚だ此状態に近きものありたるは茲に絮説する迄もなし。而して「メルカントリズム」に對する學者の謬見は此に止まらず。「メルカントリズム」は素と一個獨立の學説論として起れるものにあらずして單に時務の急に應せん爲めの權宜論として出で來れるもの漸次勢力を占むるに従ひ稍々系

統ある學説の觀を具ふるに至れるものなるを忘れ純然たる一派の學理論として之れに溢み其缺點を暴露するを例とするは甚しき誤謬ならずんばあらず。試みに「メルカントリズム」の學説を代表する學者は誰なりしやと問へ論者と雖も之に答ふること能はざる可きなり。是れ其の元來一定の學説にあらずして唯時々の必要に應じて断片的に試みたる時務論に過ぎざるを明證するものならずや。

從來學者が「メルカントリズム」の誤謬なり弊害なりとして痛撃力を餘さざりし所のものは畢竟するに其時代其の時勢の必要に應じて起れる權宜の論と見る可きものにして之を事情の全く異なる今日の經濟状態の立場より彼是評論するは輕卒も亦た甚しと云はざる可からず。蓋し此くの如き謬れる見解の從來經濟學者の間に普かりしは詮する所彼等が獨創の見に乏しく漫に先人の説に附加して屋上更らに屋を築くのみを以て能事としたるが爲めと云ふ可し。アダム・スミスの「メルカントリズム」に對する峻烈嚴酷些の假借する所なく其誤を指摘し攻撃したりしは亦た自ら時勢の必要の上より斟酌して玩味す可き所にして彼の時代の英國は、

「メルカンチリズム」の餘弊の害を被むること甚だ多かりければ、當時の急務は一に破壊攻撃にありて、一日も早く其餘流を殲滅するを要したり。されば十八世紀の末に於けるアダム・スミスの痛切なる「メルカンチリズム」攻撃論は、十六七世紀に於ける「メルカンチリズム」の論と同じく、共に時勢の産物に外ならざるものにして、二者共に中庸を得たる純正の學理論を以て目す可きものならざるなり。されば時勢の全く一變したる今日の學者こそ「メルカンチリズム」に對して公平客觀の判定を下し得可きものなれ。然るを猶古人の糟粕を嘗むるのみにして、臬者自ら其臭を知らざるの觀あるは、惜む可き限りなり。此等學者は「メルカンチリズム」が經濟生活の上に周到綿密なる干渉を試み、當時の國家が種々の形態に於て私人の經濟的行働を束縛し、附肘したるを見て「メルカンチリズム」學者は、經濟上干渉主義の萬能を學理上に於て主張したるもの、如く惟へども、斯くの如きは、當時の事情に於ては、多く止むを得ざる所に屬したるものにして、「メルカンチリズム」學者は、必ずしも此を以て萬世に通じて戻らざる不易の原則なりといたるものならざるなり。

また「メルカンチリズム」が貨幣を甚しく尊重したるは、必ずしも後の學者の惟ふが如く、貨幣と富とを同一視したるが爲めにあらず、當時實際上の必要は、國を富ませんとするに方りて、先づ第一に爲す可きとは、貨幣の充實を圖るにありたるなり。即ち貨幣と富とは同一物にはあらず、されども、當時に於て貨幣を得ることは多くの場合に於て富を得る最重要の一方法なりしなり。されば、如何にして國を富ましむ可きかの問題は、當時に於ては、如何にして國內に貨幣を充實せしむ可きかの問題と一致するが如く見えしなり。實際に於て此第二の問題を正當に解釋し得て、貨幣を多く有したる國は、又た最も富みたる國なりしことを忘る可からず。學者多く西班牙衰亡の原因を以て、其「メルカンチリズム」政策を取りたるにありと爲せども、西班牙の例こそ却て貨幣を有せざる國の貧弱に陥るの理を、最も的確に證明するものと云はざる可からず。其故は、西班牙は「メルカンチリズム」政策の運用を甚しく誤りて、ペルー、メキシコの兩國より續々輸入し來れる貨幣は、皆國外に逃れ出で、國中に残るものは銅錢のみと成れるによりて、衰亡の淵に沈淪するに至りたる

ものなればなり。之れに反し英國の大に隆興したる所以は「メルカンチリズム」の運用甚だ巧にして、佛蘭西を抑へ、和蘭を沮みて、自ら歐洲第一等國の地位を固めたるによるなり。然れば「メルカンチリズム」の功過を仔細に點檢し來る時は、功過に勝る甚だ多きに居ると云はざる可からずして、其經濟上極端なる干涉主義を取りたるものは、終局の目的に達する一の階段たりしに外ならず、到底最終の期する所は、却て經濟上の自由活動の促進にありしものと云はざる可からず。唯自由活動の將さに大に興らんとすの機運熟し來りたる後までも、猶ほ干涉主義の舊習を存續したれば、この幾多の弊害を生じたるものにして、アダム・スミスが其排撃に力を惜まざりし所以のものを決して誤れりと云ふ可からざるなり。之れを要するに「メルカンチリズム」の時代は未だ一科の學理論としての經濟學は存せず、單に稍々系統あり、秩序ある時務論ありしのみと見ざる可からざるなり。されば、時勢一度變遷して最早曩日の標準を以て律す可からざるに至れば、「メルカンチリズム」は過去の一學説として、歴史上の意義を有するに止まり、自ら之に代りて新らしい時勢に

應ず可き新らしい學説を生ず可きや、理の賭易き所なりと云ふ可し。「フキジヲクラン」の學説茲に於て起れり。

「フキジヲクラン」とは、其名の示す如く、天然に服従し、其理法の發動に一任するを以て主義とするものにして、十八世紀の中葉佛國に起り、通例路易十五世の侍醫ケネー其開祖と看做さる。「フキジヲクラン」を重農主義と邦譯するは、「メルカンチリズム」を重商主義と邦譯するに同じき誤謬に基くものにして、「フキジヲクラン」の農業を尙びしは、また自ら時勢の必要に應じたるに外ならず。其「メルカンチリズム」に反對したるは、主として自由放任を標榜し、經濟的活動に廣汎なる舞臺を與へんと期したるにありて、此點或は後世の自由論に優れるものありと云ふも妨げなし。即ち「メルカンチリズム」の極端なる干涉主義の餘弊甚しきに倦みたる時勢は、其反動として他の極端に馳せたる學説を喚起したるものなり。されば「フキジヲクラン」の長所も短所も共に此事情に胚胎するものなるを忘る可からず。其最短所は、自然界に行はるゝ因果的原則と、人類社會に行はるゝ倫理的原則とを

全然同一視したるにありて、人類社會の現象を解釋するに、一に自然界に行はるゝ方則に準じ、人間の動機、此間に働きて自然因果の理法を左右すること甚多きを度外に措きたるにあり。是れが爲めに「フキジヲクラシー」は直接後世の經濟學の上に寄與する所少く、却て眞正なる學理的研究の起るを妨害したること多し。故に「フキジヲクラシー」の經濟學に於ける貢獻は、間接の影響の上にあるものと云はざる可からず。即ち其論を行ふ頗る明晰にして、論理精確なるによりて、抽象的思索を促進したること多し。又「フキジヲクラシー」は、單に國富を充實し、個人の富を増加することを以て、研究の主眼とせず、貧者の状態の研究、其救済の研究に重きを置きたり。従て經濟論と致富論とを全然同一視するの弊に陥るを防ぎ、後に至りて起れる人世の性質を高めんとする傾向に幾分の準備を爲したるものと云ふ可きなり。然れども此等間接の影響たる未だ甚だ大なりと云ふ可からず。是れを其短所に計較し見る時は功過相半すと云はざるを得ず。獨り其間接の作用中斷して没し難きものは、其アダム・スミスに及ぼせる影響是れなり。此作用われ

ばこそ「フキジヲクラシー」は經濟學の發達史上に其地位を保つを得るなれ。此意に於て「フキジヲクラシー」の時代を以て科學としての經濟學成立の時期とは呼ぶなれ。アダム・スミス起るなく、アダム・スミスが「フキジヲクラシー」の學說に學ぶ所なかりしならんには、「フキジヲクラシー」は「メルカントリズム」と同じく、一箇の時務論たるに止りて、其以上の重要を得ること無かる可きなり。

アダム・スミスが「フキジヲクラシー」より得たる感化の程度如何は、今より之を測定すること容易ならずと雖も、アダム・スミスの學說を起すに、先づ端緒を與へたるもの「フキジヲクラシー」專者の所論なりしことは疑を容れざるなり。

アダム・スミス以前英國に於て、經濟論を試みたる學者其數決して尠しとなさず。就中サー・ダドレー・ノースの如き、ヒュームの如き、スチュアートの如き、殊に統計的現實的經濟研究の鼻祖と稱せらるゝサー・ウヰリアム・ペターの如き、又農學の泰斗アーサー・ヤングの如き、并にアンダーソンの如き、アダム・スミスの師たりし哲學者ヘチソンの如き、皆推重に値する學者なりしと雖も、是等凡ての學者は、佛國の「フキ

シヲクラシー』の學者と均しく、共にアダム・スミスの放てる大なる光の爲めに掩はれて顯れず。唯だアダム・スミスを通して後世に影響するのみ。

アダム・スミスに學ぶ可きは必ずしも其所論が悉く獨創的なりしことにからず、其偉大なる頭腦の内に先人の研究を悉く網羅し英を含んで華を吐き與ふるに該博豐富なる推論と透徹明快なる判斷とを以てしたるの一事にあり。此點より見て彼を以て近世經濟學の鼻祖とすること決して過ぎたりと云ふ可からず。蓋しアダム・スミス以前の經濟論は未だ斷片的時宜的の學説たる状態を脱せざりしがアダム・スミス一度出でて、兎にも角にも經濟學は茲に一個の學となるに至れるものとする可きなり。然れどもアダム・スミスが研究を企てたる問題は甚だ多く、其方面また多岐に涉りて到底一人の力の得て及ばざるものあり。さればアダム・スミスの所論は説て盡さざるもの甚だ多く、從て個々の點に就て其誤謬を指摘すること或は容易なるものあり。而も思を潜めて彼の論ずる所を熟讀玩味するものは、彼が常に眞理に到達す可き道程に於て着々歩を進めつゝいかりしいのなるに敬服

せざる能はず、殊に其研究法は、普通人の見て英國學派の通弊なりとする獨斷抽象の傾向を帯ぶること少く、却て歴史的現實的態度を持すること、或は今日の歴史派に比して遜色なきに至りては、彼れの時代を併せ考ふれば、誠に感嘆の外なき所と云はざるを得ざるなり。

アダム・スミスの最も力を用ゐたるは其自由貿易論なり。彼が經濟上に於ける自由活動個人伸張の大義を發揚したる之を、『シヲクラシー』に得て、更らに萬丈の精彩を著けたるものにして、永く範を後世に垂れたるものなり。彼が政府の經濟生活に干渉するは百の害ありて、一の益なきを論ずる到れり盡せり。彼は經濟上に於ける自利主義の價值を甚だ重視し、如何に缺點多き自利的行動も其發動を自由ならしめ、其趨くに放任するは、最良の政府の干渉的行動に勝るものなりとまで極論せり。後世アダム・スミスと云へば必ず此一事に想到するを常とし、獨逸の學者の名けて『スミス主義』と云ふもの亦此意に外ならず。然れども斯くの如きは亦た時勢の必要上、己を得ざるに出でたる一種の反動的要素を含むこと

其多きに居るは殆んど言を要せざる所にいて、而してアダム・スミスの最大事業は決して此點に存するにわらず。彼れが所論の精髓とも云ふ可きものは此にわらずして自ら他にあり。何ぞや。曰く彼が英國并に佛國學者從來の所論を普く網羅統一し之れに一段の進歩を加へたる其價值論是れなり。即ち價值が人間行為の動機を測量する方法に就て周到綿密なる科學的研究を試み、其が一方に於て富を得んとする買手の欲望を量り、他方に於ては生産者が其作出に要したる勞働と犠牲即ち「生産原費」を量る方法を詳論し、前人未發の論斷を下して、永く後世に依る所を知らしめたること、アダム・スミスの學理上の最大貢獻なり。

アダム・スミスは自ら自己の事業の眞誠の意味を十分に認めざりしが如く、殊に彼れを祖述せる後の學者が之を悟るに及ばざりしは事實なり。然れどもアダム・スミス一度出で、後は一方には物の所有に對する願望と、他方には物の製出に要する直接間接の諸種の努力并に自制とを共に貨幣によりて測量するの理を認識するに、前代の到底得て比し得可からざるものあり。アダム・スミスの先づ判

を拓くなくんば、斯くの如きは望む可からざる所なり。此點に於て彼の事業は凡ての他の學者の事業に勝りて、學問進歩の上に一大紀元を作りたるものと云はざる可からず。固より價值の觀念其ものは單に學者の頭腦より生じ來れるものにあらずれば、アダム・スミスは日常生活に現存する觀念に精確綿密なる説明を與へたるに過ぎざるや論を俟たず。然れども學理的思索に長せざる人は、貨幣が動機と幸福とを計量する作用を見ること、重きに過ぎ、其關係を以て確定不動寸毫の差を容れざるものとなすが爲め、反て實際の事實の眞相に遠かるものなり。今アダム・スミスの之れを論ずるを見るに、此くの如く、綜括抽象の極端に趨らず、克く實際の上に起る諸種の差別并に碍害を斟酌して立論すること、周到綿密にして、實際生活の眞相を得るに庶幾し。是れ彼が時流を抜く所以にして、實際家の觀察よりも學者の觀察の方遙かに實際的なること、能く彼に於て見る可しとなす所なり。

アダム・スミスの同時代の學者も亦た彼の門弟も、一人として、其該博、其深遠に於て彼に及ぶものなし。此等幾多の學者の爲せる所は、各其才能に應じ、特に其生存し

たる時代の現象を研究するにありて、未だ全體の考察に基く學理を建設するに至らず。殊に十八世紀の末葉に於ける諸學者は、大に歴史的記述的研究に勉め、勞働階級の狀態殊に農業階級に就て頗る敬重に値する著述を作せり。就中アーサー・ヤングは昔く諸國を旅行し、獨特の觀察を其農業狀態に就て試み、エデンは貧民の歴史を著はして、永く此問題の泰斗たり、マルサスは諸國、諸時代に於て人口の増減を支配する原因に關して該博なる研究を遂げ、人口論の鼻祖と稱せらる。然れども是等諸學者の中最大の影響を残したるものはベンタムなり。ベンタムは直接に經濟上の問題を論究したること殆んど之れなしと雖も、十九世紀の初に於ける英國經濟學者は、皆な著しく彼の影響を被むれるものなり。ベンタムの論理は峻厳にして假借する所なく、苟くも明確なる理由の存するにあらざる凡ての制限と拘束とを排撃して力を餘さず。飽迄自由放任の大理を一貫せしめざれば已まず。其論を立つるの精確にして、其敵に對するの堂々たる人をして仰ぎ見ること能はざらしむ。是れ實に英國當時の時勢に最も能く適應したるものと言はざる可から

ず。蓋し英國が十九世紀に至りて異常なる進歩をなしたる所以は、舊習は悉く之を打破し、一に新運動を採るに銳意し、極端と見ゆる迄に、進歩活働をのみ旨としたるが爲めにして、大陸諸國の之れに劣れるは、舊慣を墨守すること多く、爲めに新機運に憑して、其富源を開發利用することを怠りしが爲めならずばならず。されば英國の産業家は、習慣人情の商業上に及ぼす影響を以て、百害ありて一益なきものなりといふ凡ての舊慣舊習は、皆一齋に撲滅するの一事あるのみと信せり。ベンタムの學說乃ち此時に出て、這の實際の必要に應じて、習慣の拘束は悉く之を無視す可きことを極力主張したるなり。従てベンタムを踏襲する後代の學者は、人常に自己の利益を最も能く増進すべき道を見出すに銳きものにして、一に其指示する所に従ふものなりとの前提に基きて、人間社會上萬般の行爲を觀察するを以て足れりとし、また他を顧みることなし。されば、是等學者を非難して、彼等は社會上并に經濟上に於ける個人的行働を過重し、共同的行爲の作用を無視する甚しきものなりとするは、必ずしも正鵠を失はずして、此等學者は一に競争の力并に其作

用の速力を偏重し、從て其論動々もすれば大體論のみに止りて、實際の事情に迂く、又理を演ぶるに急にして、同情の念に乏しきを免るゝ能はず。凡る此等の弊は、一部分は直接にベンタムの影響を受けたるが爲めと見る可く、一部分はまたベンタムの生存したる時代の精神に歸す可きものなりと雖も、其依て生ずる所以を究むる時は、當時の學者が多く、哲理的思考に關如し、主として、實際的活動に長けたる人や、より成れること、其主たる原因たらずんばあらず。

當時の英國に於ては、貨幣并に外國貿易の問題最も重大なる經濟問題と看做され、學者の其講究に熱中すること「ソルカンチリズム」の時代と雖もまた及ぶ可からず。されば實際生活に通曉し、經驗に富み、經濟生活の事實に關し廣汎なる智識を有したる彼等當時の學者が、専ら此等個々の目前當務の問題に全力を傾注するに止り、善く人世を研究し、廣き基礎の上に其論を立つることなかりしは、誠に已むを得ざりし所と云はざる可からず。蓋し實際生活の經驗に富むものは、自己一家の觀察を重んずると度に過ぎ、其管見を以て直ちに各國各時に施して認らざる一般の

現象なりと遽断し、之れに基て直ちに大體に涉る結論を敢てして憚らざるは、世に其例尠からざる所なればなり。彼等實際家は常に純理を専らとする學者を呼んで、迂遠なり架空なりと云ふと雖も、其實彼等が僅かに一箇人の限りある觀察を宗とするの邊かに偏狹に於いて、又實際の真相に遠さかること甚しきものあるを自ら知らざるなり。經濟上の觀察に於て此弊殊に顯著なり。

此等當時の實際的論者の所論は、其専門の範圍に於ては大に傾聽に値するものあり、殊に通貨の問題は、深く人間の心理的研究に觸れずとも、大體に於て認なき結論に到達するを得可きなり。されば此點に於ては、リカードが率ゆる一派の學者の議論は、安全なる根據の上に立つものにして、所謂「正統學派」經濟學者の學說の中、今日に於て猶其價值を失はざるものは、金融并に貨幣に關するものなる所以なり。外國貿易に關するもの亦多く然り。蓋し經濟學の議論中、純粹なる演繹的論法の太過なくして、適用せらるゝを得ること、貨幣及外國貿易の問題の如きは、他に之あらず。固より貿易政策を研究して遺憾なからしめんには、經濟以外の考慮を參酌

するを要すると多々なれども、斯くの如きは、多く農業國に取て必要なるものにして、英國の如き工業國に於ては、其重要遙かに少なかりし事は否む可きにあらず。

斯くの如く英國に於て演繹的經濟學說の全盛を極めたる間に於ても、復た同時に經濟事實の研究に従事し、記述的精密的經濟論を試むるもの之れ無かりしにあらず。トック、マカロック、ポーター等の學者は、皆てアーサー・ヤング、ペター、エデン其他諸學者の試みたる統計的研究の業を繼承し、又議會の調査委員會の報告、殊に労働階級の狀態に關す。

甚だ尊重す可き有益の資料を供し、後世の現實的事實的研究に所依を具し、尠しとなさず。されば今日の經濟學に於て、各國の學者が一般に認識し、採用する歴史の統計的研究法なるものは、其實に於て既に巴に端緒を十八世紀の末尾、十九世紀の初頭に於ける英國學者の研究に發したるもの、云ふも不可なきなり。然れども是等學者の學風を以て今日の進境に比するときは、其間の徑庭また甚だ大なるものありて、彼等を目して直ちに今日の意味に於ける眞誠なる歴史的研究者、と爲す能はざるなり。彼等の研究は未だ偏頗な

るを免れず。其故は彼等の事實を蒐集し、歴史を尋ねるや、主として英國のみに限局し、廣く各國各時に涉らず、即ち彼等は未だ比較的研究法を學ぶに及ばざりしものなり。尤もヒニーム、アダム・スミス、アーサー・ヤング等は、皆モンテスキューの例に倣ひて、諸國諸時代の事實を蒐めて比較し、此比較より結論を下すを試みたりと雖も、例せばアダム・スミスの「各國に於ける富有の進歩」を見て知る可し、其蒐むる處は断片的にして、其論する處未だ系統的の案に基きたるものにあらず。從て其觀察する處、區々の末に走りて、反て重要な關係ある大事實を閉却し、又其蒐集し得たる事實を十分に利用すること能はず、爲めに是等事實より推究せる大體的結論に、著しき缺陷を残すは已むを得ざるの數なり。リカルド并に其學說を奉ずる學者は、議論の趣を簡便にせんとて、人間を一定不動のものと看做し、其變遷を全く度外に置き、之に基きて論を立てたり。而して彼等の見て一般普通の人間となしたるものは、所謂「シター・マン」倫敦の實業家にして、他の階級の人間の經濟上に於て爲す所全く之れに同じきものと推定せり。尤も彼等と雖も、英人以外の他國民は、各其特

有の點を有し、研究に値する差異を存することを知らざりしにあらす、唯だ彼等學者謂らく、此等特別の點は、他國人にして一度英國人の教を受け之に倣ふに到らんか、また直ちに消滅す可きものなりと。此の如きは、單に彼等學者にのみ責む可き所にわらず、元來英國人に特有なる自信強く、他を自みて悉く劣等視する通弊に胚胎する所なり、(今日にても英語は世界語たる可しと自信する英人尠からず、我邦には英人の國自慢説を如何にも眞理なるが如く尊信する論者亦あり)。而して此の謬想に基きたる經濟論は、貨幣并に外國貿易に關するものに就ては、其弊害未だ甚しきに至らざりしと雖も、其論一度沉く、人間全體に涉り、經濟上の階級間に起る所の諸問題、殊に勞働の問題に及ぶに到りては、著しき缺陷を暴露し來らざる能はず。蓋し彼等は人間の心理的作用を全然度外視し、勞働を看做して純然たる一の商品なりとし、勞働の價は死物なる商品の價と全く同一なる需要供給の原則のみによりて定めらるゝものと爲し、之よりして、所謂「利潤の法則」并に「賃銀の法則」なるものを立て、此根本の法則を以て凡ての經濟現象を論定す可しと爲せり。殊に此種

學者の最大缺點と云ふ可きは、産業上の制度習慣は絶へず變遷進化して已むなきなく、經濟上の現象は此變遷に伴ふて、また其趣を常に更めつゝ、いあるものなるを顧みざるにあり。就中彼等は、只管眼を富者の上のみ注ぎ、身を貧者の地位に置き、同情と諒解とを以て其問題を究むることを爲さず、貧者の貧乏を以て單に經濟上の劣者が受く可き當然の運命なりと斷定して、其實貧者が經濟上の劣者たり、生産力に乏しきは其貧乏なるこの原因たるよりも寧ろ其結果にして、貧者をして一度貧乏の苦痛より脱せしむる時は、其生産力は頗る高まり、經濟上の劣者たる地位を脱するものなるを思はず。從て今日の經濟學に於て、一般に最重要の研究問題とせらるゝ勞働階級の向上發展に甚だ冷淡にして、經濟上の弱者たり、劣者たる勞働階級の地位は之れを改良するの望なき確定不易の現象と見るに止まれり。斯くの如く偏頗にして狹隘なる見地に躊躇し、一片の理法より萬事を演繹して足れりとする學説は、實際生活の進歩すればする程之れと隔離すること甚しく、到底實用なき迂遠の机上論たるに終り、殊に愈々益々實際生活の上に於て重要を加

へ忼れる労働者の問題の解答に寸毫の寄與する所なく却て偶々進歩改良の妨害を爲すに過ぎざるに至り、經濟學は革新改造の氣運に促がせられざる能はず。而して先づ這箇の經濟學に對して攻撃の矢を放ちたるものを社會主義の學説と爲す。社會主義の論者は時の經濟學者に反抗して、人類改善の希望洋々たるものを主張して、一新旗幟を樹て爲に、間接に斯學の進歩と社會上の諸問題のより深き觀察とに貢献したる功決して没す可からざるものあり。然れども惜哉彼等は嚴密精緻なる歴史的純理的研究兩ながら之れを欲き、誇張の言矯激の論を專にして顧みざりしが爲め「ピジネスライキ」實務的なるを以て本領と爲したる當時の經濟學者に甚しく蔑視せられ、其功は過に掩はれて顯はるゝに至らず。當時の社會主義論者は口を極めて其時の經濟學説を攻撃したれども、多くは耳食の論にして、其敵とする經濟學説を究めて而して立論したるにあらず。されば理論の上に於て社會主義者は到底經濟學者の敵手たる能はず、輒く其論破する所となりしも誠に已むを得ざるなり。何んぞ經濟學者をして自己の所論に傾聴せしむるを望むを

得ん。彼等は根本の主張に於て没す可からざる一大真理を有したるものなるに其態度の慎重ならざる、其慮りて深からざる、氣鋭の客氣に越せて他を容るゝの雅量を有せざるが爲めに、實際に於て捨つ可からざる真理を學理の上に於て建設すること能はず、唯一種の感情論と看做さるゝに止まれり。然れども當時理論に弱かりし彼等は感情の上にては甚だ強く、殊に當時の學者の殆んど捨てゝ顧みざりし下層階級の實情に通ずる詳密なるが爲め、此點に關する彼等の所論は理論として未だ甚だ不備のものたるを免れざりしかども、實際に於て人類の深き要求に應ずること經濟學者の學説に勝り、極端の論、蕪雜の言の中、自ら深遠劃切なる真理を包み、經濟學者并に哲學者の細心研鑽に値するものありて、終に斯學革新の機運を啓く導火となれり。佛國の大哲學者フーギユスト・ユムトが此の社會主義に負ふ所の大なるは、到底否定す可からざる事實にして、英國經濟學中興の祖と認めらるゝジョン・スチュアート・ミルは、其妻によりて社會主義思想の影響を受けて、晩年思想上に一大變化を被むれることは、自ら明かに其自叙傳に告白する所なら

すや。此一事を以て復た多言の要なきを知る可きのみ。

今日の經濟學の舊式經濟論と相分つ所は甚だ多々なりと雖も其根本に横はる差異は能く一言を以て道ひ盡くすを得可し。曰く人性に對する其見解の全然異なることと是れなりと。舊式の經濟學者は人間の性格と能力とは一定不動なりといたるに反し今日の學者は人間の性格も能力も共に包圍の事情の結果に外ならずとなすなり。今斯くの如き變化を喚起したる原因を尋ねるに凡る三あり。

一最近五十年間に於て人間の性質に於ける變化實際上甚だ急激にして學者もまた勢之を看過する能はざるに至りしこと。

二社會主義の議論の影響甚だ大なりしこと。

三自然科學に於ける大進歩殊にダルウキンの進化論はまた社會科學の上にも大なる影響を及ぼし終に人類と其社會生活とを以て自然界に於けるに均しく一定不易のものならず絶へざる進化發展の産物なりと觀察するに至れること。

是れなり。今此等三原因の相共に働きて此に新生面を開くに至れるものをジョンスチュアートミルの學説と爲す。之れに續てはクリフレスリトありて専ら歴史的研究の方面を開拓し其他ベジヲツトケルンズトインビー等ありて皆新傾向の促進に預りて力あり。殊にジェヴォンズに至てはミル以後に於ける最卓越の學者にして理論の上に於てミルを凌駕して新見地を立てたるもの多々あり。然れどもミル一度去て以來英國は從來獨占し來れる經濟學の鄰國たるの地位を失ひ此特典を分つの權利を有する國他に起るに至れり。先づ佛國にはセイクールノ等の學者ありて多くの點に於て英國學者の誤謬を匡正したり。然れども佛國の經濟學上の貢獻は此等専門經濟學者に依りて爲されたるもの甚だ少くして却て其敵たかりし社會主義者に多し。即ちフリエーサンシモンブルドーンルイブランの四人は後世の學理的社會主義の先驅として見る可きものにして其間接の感化輕視す可からざるものあり。米國に於ても近來經濟學者しく發達するが如しと雖も今日までに生じたる最大の米國經濟學者はケリーにして其重なる事功

は英國學者の自由貿易論に反對して、保護主義を唱道したるにあり。和蘭伊太利に於ても亦近來經濟學研究の大に盛なるを見る可し。然り然りと雖も、近世經濟學の發達に最大の貢獻を爲し、英國に交代して、現今斯學進歩の嚮導たるものは、獨逸の學者なりとす。蓋しリカルド派の徒らに自尊自信に強く、島國的偏狹を忌憚なく表はせる學說を憤るの念最も深く、之れに反抗せんとの精神の最も熾なるは、産業上の競争に於て永く英國の後塵を拜したるの後漸く之れと對抗し得るに至らんとせる獨逸の學者なる可きは、理に於て誠に當然と云ふ可く、殊に英國の國情と其必要とに應じて立論せられたる自由貿易論は、工業國たる英國に取りてこそ太過なきを得れ、經濟上の進歩未だ遙かに之れに及ばず、主として農業國たりし獨逸には實際上直ちに適用し難きもの多々あり。されば獨逸學者の先づ第一に英國學者に反抗したるは、其貿易論商業政策論にありて、英國學者以外一新旗幟を翻して先づ起ちたる學者をフリードリヒリストと爲す。リストを以て今日流行の保護政策論の鼻祖と爲すものあれども、是は當を得ざるも甚しきものにして、リスト

は英國に就ては從來の英國學者の所論大體に於て誤なしとし、唯だ工業の發達未だ十分ならざる國にありては、幼者保育の趣意を以てする保護の政策を採る可きものなりと主張したるものにして、英國學者の議論とリストの議論とは必ずしも全然相撞着するものにあらざるなり。而してリストは獨り獨逸の學問の上に大成化を残したるのみならず、長く米國に住居したるが故に、米國に於ける保護政策論者の爲めに萬丈の氣餒を吐きたるものなり。然れども、リストは學者よりも事ゑ愛國の志士と云ふ可く、其學理上の事業は、通例人の思ふが如く大なるものにあらず。彼が個人と世界とを偏重する英國學者に反對して、國家主義を標榜したるもの専ら其愛國的感情より出で來れるものにして、是亦當時獨逸の國情を鑑みる時は已むを得ざるに出でたるものと云ふ可きなり。されば時勢を異にし、國情を異にする他國他時の學者が、リストの所論の一端をのみ捉らへて、輕々に祖述雷同し、深く其因て來る所以を察せざるは、大なる誤謬を招くの基となるの外なきなり。蓋し當時獨逸は未だ統一せる一國を成さず、されば當時獨逸の爲めに圖るものは、

一日も早く中央集權を確立し、國家の權力を鞏固にし、統一的帝國を建設するを以て最重の急務と成せしや言を俟たず。リストが此間に立て國家主義的經濟論を極力鼓吹したるの功は決して没す可からざる。共に一度統一集權成るの日は、リストの所論はまた之れに準じて斟酌して見るは公平なる學者の爲す可き所なり。リスト以前にありて理論の上に於て英國學者以外別に一家を成したるものをヘルマンと爲す。然れども經濟學の新研究の上に於て獨逸を重からしめたるものは、遙かに後れて出でたる、ロシア、クニス、ヒルデブランド三學者の始めたる所謂歴史派なり。ロシアは著述する所最多く、從て其影響は顯著なりと雖も、必ずしも深遠精刻なる思想家と云ふ可からず。之れに反して、クニスは終生著述する所も多からず、其流布すること甚だ僅にして、表面に顯はれて活動すること尠かりしが故に、外國學者の彼を知るもの尠く、獨逸にありてすら忘れられたるが如くなりと雖も、其推理の透徹せる、其思想の該博深遠なる多く其儔を見ず。殊に最近に到り漸く盛となれる經濟心理の研究は、彼の夙に力を用ひて從事したる

所にして、今日と雖も未だ彼の上に出づるもの多からざるなり。ヒルデブランドは不幸夭死したるが爲め、三者中事功最も劣るものゝ如しと雖も、其僅少の著述は甚だ尊敬に値するものあり。其他ラウアー、ヘルドあり、シユンペラーあり、コーンありて皆新傾向の促進に預て力ありと雖も、現存新學の三泰斗として普く認めらるゝは、ワグナー、シユンペラー、ブレンタノの三者なり。或は此三者并に其流を汲める現今の學者を綜稱して「新歴史派」と爲してロシア等の舊歴史派と對峙せしむるものありと雖も、此三者の傾向必ずしも相同じからず。就中ワグナーは國家に重きを置くこと最も多く、其研究法に於てまた演繹法を取ることも多し、而して其政策論は純然保護主義の一方に偏し、人口の問題に於ては、大體に於てマルサスを奉ずる等新式學者中の最も保守的なるものと云ふ可し。シユンペラーは専ら經濟史の研究を以て顯はれ、事實的敘述的傾向の絶好の代表者なれども、純理論に於ては甚だ薄弱にして、時に舊時のポリヒストリー（一定の理論少く諸種の智見を蒐集するもの）に酷似するものなきにあらず。其政策上の見地は著しく官僚的ビュロクラチクにして、而して權宜の論を

好み、商業政策に對する態度亦明確ならず。社會政策に於ては、間々極端なる干渉主義を主張することありて、時にワグナーを凌ぐことすらあり。ブレンタノは事實的歴史的研究に勉むると共に、純理の明確に重きを置き、政策上の態度は旗幟鮮明にして、商業政策に於ては、大體に於て自由活動を甚だ尊重し、社會政策に於ては、勉めて官僚主義を排して、自由任意の團結に依る組織主義オガニスムを取る。爾餘の學者は、以上三者の何れかに所依するものと見て、太過なく、大體に於て社會政策の講究、歴史的統計的研究方法を重ずること皆同じく、相集りて「社會政策學會」なる有力の結合を成し、勞働階級の地位の上進に鋭意す。唯其れ一方に熱中するものは、他方に陥なきを得ず。現今獨逸學者通有の弊は、政策と記實とに専らにして、純理の明確を重視せざるにあり。歴史的敘述に成る所論は、該博精緻人目を驚かすものあり、雖も理論上の解剖に到つては、前人の舊套を襲ふこと多く、獨創嶄新の見解の見る可きもの甚だ少く、此點に於ては、今日と雖も英國學者に一籌を輪せざる可からず。其内マーシャルは、一方に於て獨逸學者最近の研究に通曉し、其長を收むる

と共に、他方には英國學者に特有なる純理的研究を忽かせにせず、方今新學の最も進歩せる立場を代表する學者として推重に値す。

社會主義學者近來の進歩も、また經濟學者に劣らず、歴史的統計的研究に於ても、遜色なく、理論的研究に於ては、間々經濟學者の弱點を衝きて、更らに新方面を拓くものあり。此點に於て近世學理的社會主義の學祖と稱せらるるカールマルクスは、優に班を經濟學大家の中に列するを得るものと云はざる可からざるなり。

經濟生活は間斷なく進化發展して息む時なし。されば之に關する學問なる經濟學も亦た常に進化の行程上にあらざる可からず。以上略述したる經濟學の變遷は實に此理を證するものなり。然りと雖も千變萬化の中、又た自ら終始一貫せる根本の原則ありて、時と處との異なるによりて影響せられざるものなかる可からず。然らざれば經濟學は一科の獨立せる學問として存立するを得ざるなり。經濟學現今發達の程度は未だ全く此要求を充たし得たりと云ふを得ざるなり。是れ主として最近の傾向の政策論に専らにして、純理論を等閑に附するが爲めならざ

るなきを得んや。然らば、向後新學の力を用ゆ可きは先づ、純理の方面にあるや、多言を要せずと云ふ可きなり。

補遺

經濟學史の書世に其類尠からずと雖も、一卷の内に全體を網羅して克く遺憾なきを得るもの一も之れあるなし。今日までの處にては先づ最も推奨に値するはイングラムの著なり。即ち

Ingram, A History of Political Economy. New York 1888.

にして、此書獨佛等の外國語にも翻譯せられ、其行はるゝこと廣く、日本譯も亦あり。然れども其上古及中古を説く所甚だ簡に過ぎ、近世に至りても専ら英國に偏し、肝要なる大陸の叙述に薄く、殊に最新の研究を參酌するに於て甚だ遺憾多し。

此書に類して善は簡潔なるものに

Price, A short history of political economy in England from Adam Smith to Arnold Toynbee.
London 1891.

あり。列傳體に英國に於ける經濟學の發達を叙したるものにして、初學の士を助くること、或はイングラムの著に勝るものなきにあらず。イングラムの著と全く同一趣向に成れる佛書あり。即ち

Espinas, Histoire des doctrines économiques. Paris 1892.

是れなれども、此書は亦た上古に偏して初學者の全體を知らんと欲するものに便ならず。之れに反し近頃佛國リヨン大學の教授ラムボー氏の著はしたる

Rambaud, Histoire des doctrines économiques. 2. E. Paris 1902.

は、イングラムの著よりも稍詳密にして一冊にて大要を概るに便あり。

獨逸書は部分的研究のものは其數頗る多しと雖も、全體に涉るものにして未だ此種の適當のものなし。獨逸經濟學の歴史は、今日にても未だロシナーの大著述を推して斯學第一の書と成さざる可からず。即ち

Roehner, Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland. München 1874.

是れなり。但し最近斯學の著しき發達は此書説く所を變更せしむ可き新研究

を多々起したれば、初學者に驚むるには大に斟酌を要す可きや勿論なり。猶ほ伊太利書に甚だ便利なる書あり。コツサ氏の著はせる

Cossa, Introduzione allo studio dell' economia politica. 3. E. Milano 1892.

にして、佛譯あり、英譯あり、我邦には此英譯を翻案したるもの數種ありしやに記し、英譯本の表題は、

Introduction to the study of political economy. London 1893.

と云ふ。コツサ氏は學者として深き研究者にあらず、其著す所凡て皆コムバイレーション(編集)と稱す可く、獨創の意見に成るもの甚だ乏し、此書に至つては殊に然り。されば其説く所悉く淺薄、皮を相して肉に至らず、初學者に便なるには相違なれども、初めより多讀を期せざるものは、須らく第一流の書のみを讀むを却て勝れりとする點より云へば、必ずしも推薦す可き書と云ふを得ず。此意味に於ては全體に涉りて淺く博く學ばんよりは寧ろ一局部に就て精密を知るを可なりとす。

此目的を達するに絶好の一書あり。

Cannan, A history of the theories of production and distribution in English political economy
from 1776 to 1848. 2. E. London 1903.

是れなり。此書は書名の示めす如く英國に於て經濟學の隆盛を極めたる時期に就て、其學說中最も肝要なる生産と分配とに關する諸學者の所論を叙述評論したるものにして、獨逸にも佛蘭西にも之れに比肩す可き著述あることなし。

此他經濟學史を以て書名とするものに多々あり。然れども、ブランキの著の如き、カウツキの如き、デューリングの如き、デニスの如き、ニースの如き、ツェルンスキの如き、ソスニール・マリニーの如き、リーセンの如き、マクラウドの如き、ヅキエニューヴ・バルシュエモン^{の如き}、ロスバツハの如き、皆一部分に就きては甚だ尊重す可きものありと雖も、之れを今日の立場より見る時は、經濟學史の名を許し難きものと云はざる可からず。殊に本章叙ぶるが如き着眼點を以て、統一的發展史的に、經濟學の變遷を觀察したるもの甚だ少く、單に事實人名の排列に

過ぎざるもの多し。新學の爲め甚だ惜む可き所なり。

最新の出版に係るものにして主として獨逸に於ける經濟學最近進歩の状態を各題目に分つて詳述したるものに左の一書あり。

Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre. 1908.

右は専らシエモラー氏を中心とする諸學者が同氏七十歳の賀を紀念する爲めに合作したるものにして、卷帙浩瀚空前の大篇なれども、所掲論文の價值必ずしも同一ならず又問々公平を缺く嫌あり。必ずしも完璧を以て目し難し。此書よりも遙かに實用的にして體裁亦整へる經濟學史の書には、昨千九百九年出版に係る左の書あり

Ch. Gide et Ch. Rist. Histoire des doctrines économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours.
Paris 1909.

此書は現存書中にては最も初學者に熟むるに足るものなる可きか、英譯若くは邦譯の出でんこと甚望ましき所なり。

本章は「マルカンチリズム」以降に説明を限りたれば希臘并に中世の基督教の經濟學に於ける貢獻を全く眼中に置かず。されば稍々進んで研究せんと欲するものは必ず此兩時代に就て多少知る所あるを要す。中世基督教と經濟學との關係に就ては予は「トマス・ダキノの經濟學說」に於て稍々詳細の説明を試み、最近の研究に基て自家の説を下し置きたり。今は收めて「經濟學研究」百一頁至百四十三頁にあり。希臘に就ては今直ちに驚む可きものなきを遺憾とす。

猶ほ邦書にては、

金井延氏社會經濟學 自三百三十八頁至四百六十九頁

氣賀勘重氏經濟原論 自七百八十六頁至九百二十三頁

を併せ見る可し。

前例を追ひマーシアル氏が引用せる諸書の原名を左に掲ぐ。

「マルカンチリズム」に關して、

Kant. Die geschichtliche Entwicklung der Nationalökonomik. (Theorie und Geschichte der Nationalökonomik. Bd. II.) Wien 1860.

Travers Twiss. View on the progress of political economy since the 16th century. London 1847.

Bonar. Philosophy and Political Economy in some of their historical relations. (Library of Philosophy edited by Muirhead). London. 1893.

佛國に於ける系統的經濟學の嚆矢なりとして、

Cantillon. Essai sur la nature du commerce en général. 1755.

初めて「ンキシヨクラーチー」なる名を用ひたる書として、

Dupont de Nemours. Physiocratie ou constitution naturelle du gouvernement le plus avantageux au genre humain. 1768.

ノブト・スミスの經濟學として、

Wagner. Grundlegung. (前に出づ)第六頁

Hasbach. Untersuchungen über Adam Smith und die Entwicklung der politischen Ökonomie.

Leipzig 1891.

Knies, Politische Oekonomie. (前に出す).

第三章 第三節

Fellbogen, Smith und Turgot. Ein Beitrag zur Geschichte und Theorie der Nationalökonomie. Wien 1892.

Zeyss, Adam Smith und der Eigennutz. 1889.

○ 其他雜誌論文は略す。

第五章 經濟學の範圍

近世社會學の鼻祖オーギュスト・コムトが、人類の社會に於ける行動を個々の専門の學問に分割して研究するは不可にして、之を一括して社會學の下に研究すべきものなりとして、初めて社會學なる一科の學を唱へ出して以來、之に附和する學者尠からず。彼等思へらく、社會生活上の現象は、交々相錯し、甚だ密接なる關係を有するものにして、之を個々の方面に分割して觀察するは、到底其真相を得る所、以にわらず、故に是等個々の専門學者は、皆各自の立場を捨て、全體を統一する社會學の研究に勉むべきものなりと、是れ一見正當なるに似て、事實は即ち然らず。

人類の社會に於ける行動の範圍は、甚だ廣く、頗る複雑にして、到底一個人の力に及ばざるものあり。コムト并にハーバート・スペンサーの該博なる智識偉大なる天才を以てして、猶ほ且つ其成就せし所は、幾かに社會學の端緒を啓きたりと云ふに過ぎざるを以て、之を知るべきなり。

希臘の學者は、哲學の方面に於て大なる事業を成したれども、自然科學の上に於ては其進歩は甚だ遅かりき。其原因は、凡ての自然現象を單一の基礎の上に築きて觀察せんとしたるにありて、近世に於ける自然科學の著しき發達は、此廣汎なる各般の問題を細分して、各々一部分を專攻するに至りたるに由るものなり。社會現象に於ける亦然らざるを得ず。

然れども、他方に於ては、自然科學に従事するものと雖も、尙コムトの主張せるが如く、單に其研究を一部分にとりめず、近接の諸方面と相照し、相較べ、其間に絶へず密切なる接觸と連絡とを保つにあらざれば、功を收むること能はざるは争ふべからざる所にして、單に一局部の研究にのみ齟齬して、全體の關係を度外に附するは、社會現象の研究に従事するものに於ては、殊に戒むべき所とす。コムトが主張は此弊を矯むるに與つて、大に功あるものと云はざるべからず。ジョン・スチュアール・ミルは之を布演して曰く、「經濟學者にして其他何者にもあらざるものは、また善良なる經濟學者たる能はず、社會現象は各互に働き合ふものなるが故に、之を個

々に引離しては其真相を得る能はず、社會の物質的、産業的現象は其れ自らに就て全體論を下し能ふべきものなるや勿論なれども、是等の全體論たる、必ず常に一定の文明の形態、一定の社會進歩の階段と相關聯するものならざるべからず」と。(ミル「コムト論」第八十二頁)。

然れどもミル并に其先進が經濟學の範圍なりと定めたる所必ずしも正確なりと言ふべきにあらず。固より經濟學の範圍を擴張するときは、之が爲めに確定精密を失ふこと必然にして、失ふ所或は得る所のものに勝るなきを保せずと雖も、常に必ず然りと云ふは亦た非なり。されば、經濟學の範圍を定むるには、其範圍を擴張するに依りて得る所之れが爲めに失ふ所に優る點を以て程度とせざるべからず。

社會諸學の中、經濟學は特別なる便宜を有するものなり、其は他にあらず。經濟學が主として研究の對象とする所のものは、最も容易に且つ明瞭に秤量せられ得るものなること是れなり。即ち經濟學の論ずる欲望、動機は、必ず一定の貨幣額を以

て秤量せられ得るものなり(ミル「論理學」第六卷第九章第三節を見よ)。經濟學は人間の欲望に關係する學問なるは人能く之を知る。然れども單に欲望其物を論ずるものにあらず、又欲望の全部を論ずるものにもあざることば、從來學者之れを看過せり。(拙著「經濟學研究」三百六十頁以下參照)。

經濟學が研究の問題とする所は、欲望の充足が經濟的と稱する特定の條件の下にあるときのみを指すものにして、其條件は何なりやとの間に對して從來提出せられたるもの二あり。

一 勞働を費すを要すること。

二 欲望充足の手段が限りあること。

之れなり。然れども此は未だ萬全の説明と見做すべからず。何故となれば、經濟學の論ずる所は、直接に欲望其物を論ずるにあらずして、其發動して一定の結果を生ずるときに限るものなればなり。故に經濟學は或一定の結果に向て行はるい欲望充足を研究するものにして、此意味に於て、經濟行爲は必ず之を目的と關

聯して見るべく、即ち一の目的行爲(ツヴェック・ハンドリング)なりと云はざるべからず。されば經濟學にて欲望を論ずるときは、先づ必ず間接に其結果に就て論を立つるに止まる。然るに此結果たるまた種々ありて、必ずしも悉く皆經濟的なりと言ふべからず。經濟的なる欲望充足と、然らざる慾望充足との區別は、其一定の結果が貨幣類を以て秤量せられ得るや否やの標準に依るの外、適當の説明を下し得ざるものなるを知らざるべからず。是れやがて、經濟學が他の社會諸學に優りて明瞭精確なる議論をなし得る所以なり。審美上の欲望と云ひ、學問上の欲望と云ひ、或は道徳上の欲望と云ふが如きは、等しく重要なる社會上の現象なること否むべからずと雖も、之を其結果によりて秤量すること甚だ容易ならず。又時と場合との異なるに依り、人の同からざるに依りて、其結果なるものを比較對照すること不可能なることあり。之に反し、經濟上の欲望は、常に一定の貨幣類に於て表はるゝものを指すものなるが故に、其標準は的確にして、其秤量は甚だ容易なり。例を以て之を示さん、米食と麥食とは、何れかより能く人生の欲望を充すかを判

定するに種々の方面より之を見るを得べくして、其内容の分拆は別に難事ならざるも、其優劣を生理上一定の數字を以て言ひ表はせと要求せらるゝとも、之れに答へんこと容易ならず。之に反して米と麥との經濟上の優劣は貨幣額によりて表せられたる其價格を比較すれば直ちに之を定むることを得るなり。固より此貨幣額によりて言ひ表はされたる優劣は、直ちに人生に向て其二者の有する優劣の全部と見做すべきにあらざるは勿論なりと雖も、經濟上の優劣は其全部の優劣を定むべき出立點を供するなり。經濟學者の物に對し、人に對する、決して貨幣の高のみを以て能事終れりとするにあらざして、凡ての方面より之を觀察すべきは無論なれども、他の優劣に至りては之を知ること容易ならざるに、經濟上の優劣に至りては、之を言ひ表はすこと精確なるを得るが故、先づ之れを取りて研究を始むるに外ならざるなり。

所謂快樂と苦痛との秤量の如き、亦此意味に於て解釋すべきものにして、ペンタムの影響を受けたる功利主義の論ずる所に、誤謬の存するは争ふべきなしと雖も、

後の學者が口を極めて非難するが如き謬見を包藏したるものと見るは、却て大なる誤謬なり。其故は、彼等の快樂と云ひ、苦痛と云ふは、先づ最も之を秤量對照するに便なる貨幣額を出立點としたるに過ぎずして、之を以て盡し得たりとしたるにあらざるや明なればなり。即ち最少の勞費を以て最大の効果を收めんとする所謂「經濟の本則」なるものも、他の標準の得易からざるが爲め、先づ之を貨幣額に言ひ表はして、最少の支出を以て最大の收入を得るを標準となしたるに過ぎざるなり。後の學者が之を思はずして、攻撃の鋒を鋭くするは、聊かのなきに矢を放つ之感なき能はず。

されば單純に經濟上の立場のみに限るも、金錢額によりて秤量せられたる優劣は、直ちに全體の優劣とすべきものにあらざして、是には幾多の制限の存することを知るべからず。即ち先づ第一に、同價格によりて言ひ表はされたる快樂若くは満足と雖も、人を異にし事情を異にするに依て、其實質の上に大なる相違あるを知るべきなり。富者の一圓と、貧者の一圓とは、價格の稱呼相同じと雖も、之を失ふに

よりて来る苦痛は、大に異なるものにして、同じ人において、囊中温かなるときの一圓と冷かなるときの一圓とは、又甚だ異なる重要な有するものなり。是と同じく、等しく一圓の収入を得るも、富者と貧者とによりて、之より得る快樂若くは満足増加は甚だ異なるものなり。假りに貧富の差異を度外に置くも、尙人々の地位、身分、天賦、性癖、習慣等の異なるによりて、同じ貨幣額も甚だ異なる快樂若くは苦痛を意味するものなり。唯之を全體に就て概観する時に於て、是等の個人的相違は大抵相平均し、同じ貨幣額によりて示されたる物の與ふる快樂若くは苦痛は、原則として同一なりとするに於て妨げなきなり。次に事情の異なるは又甚だしく相違を生ぜざる能はず、殊に其人の屬する社會階級、其人の營む職業、其人の住む地方、并に其物を得若くは失ふ時期の異なるによりて、甚だしき差異あるを免れず。然れども、是れ亦廣く凡ての異なる事情を概括して見る時は、個々の差異は概ね平均せられて、同じ地方、同じ職業、同じ階級、同じ時に於ては、一定の貨幣額の意味する快樂若くは苦痛の量は、また同一なりと言ふを妨げざるなり。唯此全體の

概括を個々の場合に適用するに於て最も細心の注意を要するなり。

更に轉じて、他の方面より之を見るに、人間の經濟上の活動は、必ずしも常に理性的判断のみに基きて行はるゝものにあらず、否多くの場合に於ては、専ら習慣の情に支配せらるゝを常とす。然れども此習慣なるものも亦多くは過去に於ける綿密なる判断、思慮ある選擇の結果なることを記せざるべからず、而して營利行為に於ては、理性的判断、正確なる事前の秤量の力に由ること多きは言ふ迄もなし。

從來經濟學の主として論じたるは、此意味に於ける營利行為にして、後の學者が此點を以て彼等を攻め、彼等は人間を以て單に理性的判断のみによりて支配せられ、常に貨幣額によりて表はされたる差異を追求する利己主義、即ち所謂經濟的利己主義のみによりて支配せらるゝものなりと爲すと難するは、誤解に基く妄斷と云はざるを得ず。彼等に攻むべきは、營利行為に就て立論したるものを、少しの斟酌を加ふることもなく、直ちに經濟行為全般に適用すべきものなりと速断したるの一事にありて、カール・ライル、ラスキン等の此點を以て極力經濟學者を攻撃したる亦或

は止むを得ざる所と云ふべきなり。但し、貨幣額の損得によりて、常に理性的に其行爲を撰定する産業生活の行動は、最も精確、最も綿密に研究するを得るものにして、學者が先づ此點に指を染めたるは、必ずしも咎むべきにわらず。唯だ此産業生活に於ける人と雖も、決して貨幣額の堆積量を以て、凡てを秤量し盡くすものにあらず。多くの場合に於て、近世企業家の行動を最も強く支配するものは、貨幣額の多少に表はれたる損益にあらずして、他の人に打ち勝たんとする名譽心、或は廣く之を言へば、近世社會の特長たる行動の衝動(テーチビカイトリブ)是なりと言はざるべからず。而して他方には直接産業生活に關係なく、貨幣の得喪を度外に置くが如き觀を呈する行動にありても、畢竟は之を秤量し、之を判斷し、其優劣上下を定むる標準は、多く貨幣額を借り來るものなり。他の點に於て、事情悉く同一なるときは、其行爲の結果として、貨幣額をより多く持ち來す行爲を以て成功とし、其然らざるものを以て失敗とすること、世上の習ひなるにあらずや。されば、經濟行爲は、貨幣額を以て秤量すと云ふは、貨幣を以て、萬能と見做すが爲めにわらず、之を以

て、更により高き目的に導く所の手段となすに外ならざるなり。此意味に於て、經濟上の財(グーズ)は、低き財にして、倫理上の善(グッド)は、高き財なり。従て、經濟上の富とは、より高き意味に於ける富に到るの前提となさざるべからず。即ち其標準の精確にして、其秤量の綿密ならんことを要するの意に於て、經濟行爲とは、貨幣額に於て表はされたる其結果によりて定めらるゝものを意味し、經濟上の欲望とは、斯くの如き結果を目的とする欲望を意味すとすに過ぎざるなり。

故に經濟學は一般人間の社會的行動を支配する凡ての感情、道念、理想等を無視するものにわらずして、出來得る限り廣く之を考慮に入れ、或度迄は精確綿密を犧牲に供しても敢て辭せずとなすものならざるべからず。只斯くの如き廣き理想、道念、感情より起る社會行爲は、其作用茫漠として捕捉し難く、其結果も亦た一定の標準に照して測定し易からず、従て此複雑なる現象を概括すべき理法を立つること、時に甚だ困難なるを覺悟せざるべからざるなり。

終りに一言を要するは、近世經濟生活の發展は、益々共同的行爲を普ねからしめ

いとする傾向があることは是れなり。此點に於て從來の學者が經濟學の出立點を個人に置きたるは誤謬と斷ずるの外なし、殊に將來の發展を推すに當りては個人中心の經濟論は正鵠を失するもの多し。經濟學に於て個人を論ずるは之を社會の一員として見るものにして、單に孤立單獨なる個人として見るべきものにわらず、唯研究の方法としては部分より全體に進み、近きより遠きに及ぼすの外なきこと勿論なるが故、個人の行動を標準とするは已むを得ず。而して是をなす常に個人より社會全般の作用に到達せんと念を忘るべからず。然れば經濟學が一箇の學としての範圍も此點より定む可きなり、即ち經濟學研究の範圍は實際社會の外に出づべからず、假想的なる經濟人の推定の如きは固より之を捨てざるべからず、唯之をなすに當りて、

- 一 勉めて確定の標準、精密なる秤量を下し得べき現象を基礎として論を立つること。
- 二 此標準は貨幣價值に取ること最も其當を得たるものにして、而して貨幣價

値にて秤量せられ得る動機の下に働く人間行爲より生ずる現象は、必ず相互間に密接なる關係ありて一體の系統をなすことを忘る可からざるなり。

故に經濟學の範圍に關する爭論に腐心するは甚だ無益の業にして、實際上に起る問題は普く之を探り、實際社會に於ける現象は常に之を漏らさざることを勉め、其標準は精確にして容易に比較對照し得べきものたるを要す。此標準を備ふるものは悉く之を探り、之に合はざるものは、其犠牲の大ならざる限り之を探るべく、始めより偏隘なる分界を立て、自ら狭ふせざるを以て心とすべきのみ。

補論

本章の論旨は既に第一章の補論に於て言ひ置けるが如く、英國流の經濟行爲を主として經濟學中心の問題とする研究法を、マーシアル氏が採用せるものなることを忘れては、其真意を捉へ難し。されば、之れに經濟組織論を併立せしめざれば、新學現在の範圍を定め得たりと做す可きにあらず。

經濟學の範圍を専ら經濟行爲の研究に止めて之れを見るときは、マーシアル氏が從來營利行爲のみを以て經濟行爲と看做したるの不可なるを論じ、經濟學者は一様に「ヘドニズム」又は功利主義の哲學を基礎とするものなるかの如き見解の甚だ謬れるものなるを極言し、其貨幣價值を標準として人と物とを判定するは、之れを以て全部を盡くすものと做すが故にあらず、唯一應精確の標準を定むるの便宜上必ず之に依らざる可からずと爲すものなるを明かにしたるは、現今最も進歩せる學者の一致する所なり。而して此論はまた移して以て經濟組

續論の根本概念と爲すを得可し。蓋し經濟行爲と云ひ經濟組織と云ふ兩者共通の基礎は「經濟」なる一語にあり。然るに近來經濟組織の論を提出して、斯學の上に一新生面を開きたる獨逸の學者は、其基礎たる「經濟」又は「經濟的」なる語の意義を精査することなく、甚だ曖昧なる説明を下すもの多し。シユモラー氏の如き殊に然り(拙著「經濟學研究」三百十頁及八十六頁を見よ)。此に比ぶれば、マーシアル氏の説明は、甚だ明瞭にして、大體に於て要を得たりと云ふ可し。予は經濟行爲と經濟組織との兩者を包含して、經濟學の範圍を要言せんと欲して、「國民經濟原論」に於て、始めに「分觀の概念」を説き、次で「集觀の概念」を説きたりと雖も、今に及んで其甚だ不十分なりしことを見出さざるを得ず。其は他にあらず、予の所謂「分觀」と「集觀」とは、單に言語の上に於ける觀察に外ならずして、未だ實際の現象を分け得たるものにあらざること是なり。然らば如何にして實際の現象を解剖し盡くして、克く經濟行爲と經濟組織との統一調和を保たしむるを得可きやと問ふ人あらんか、予は未だ其法を知らずと答ふるの外なし。予が最近に於

ける研究は、専ら力を此點に集めて従事しつゝあるものなれども、其困難なる愈々思へば愈々支離し、今日に於ては、未だ公けにして人の教を乞ふ可きものを得ざるなり。乃ち本章に於て、經濟組織に就て論辨することを全く避けたるは、未熟の見を以て、初學の士を過たんことを恐れたるが爲なり。讀者深く之を諒せよ。

* * * * *

經濟學研究の範圍并に方法を論じたるもの甚だ多しと雖も、皆自家一流の管見を取て、直ちに他に強ひんとするものにして、輕々しく初學の士に驚むるを得ず。中に就て先づ最も英國學者一般の態度を代表するものとして要領を得たりと云ふ可きは、マーシアル氏の引用したる左の書なり。

Keynes, The Scope and Method of Political Economy. 2. E. London 1897.

而して同時に必ず獨逸學者の地位の一斑を知らざる可からず。此には前に掲